

せかい ばなし

世界のむかし話

二年生

学年別・新おはなし文庫





偕成社

ときありえ 編著

せかい

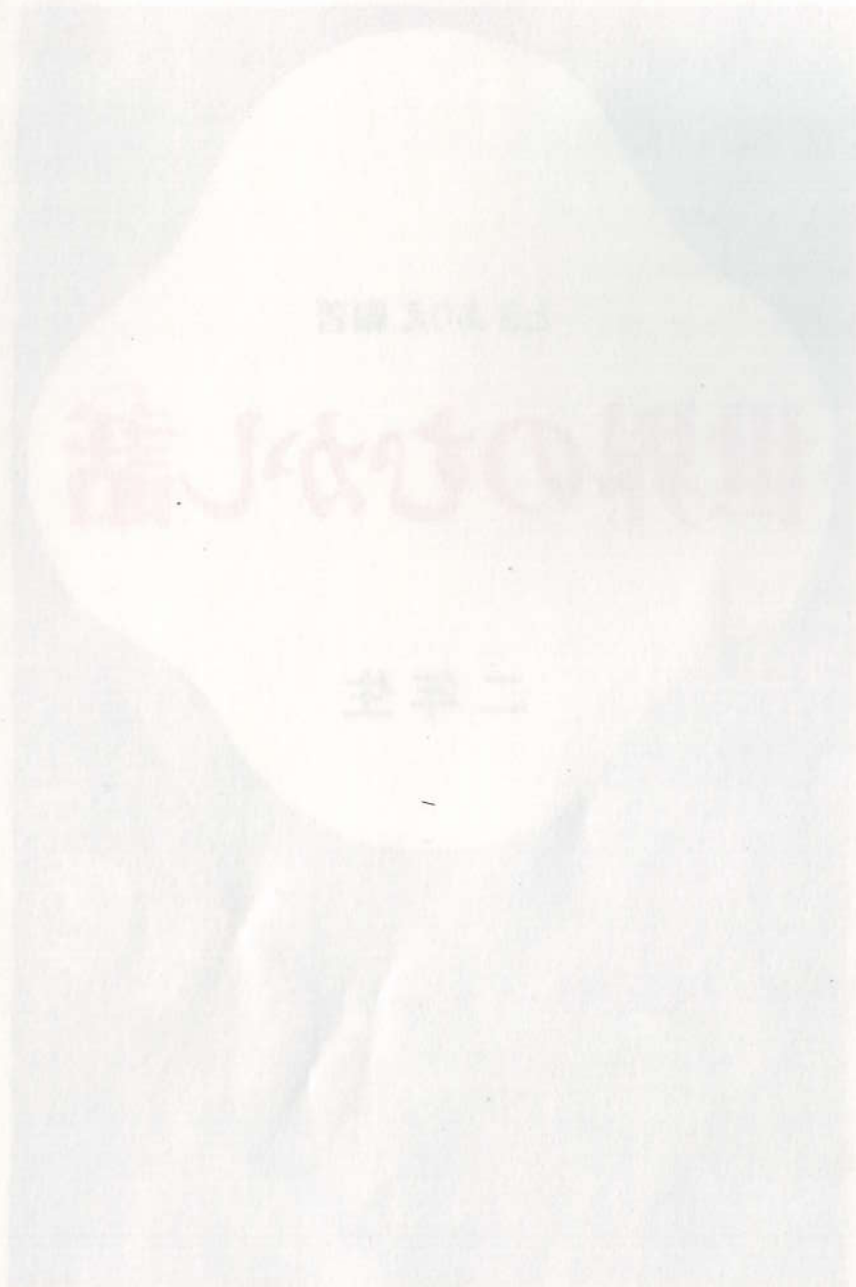
はなし

世界のむかし話

二年生

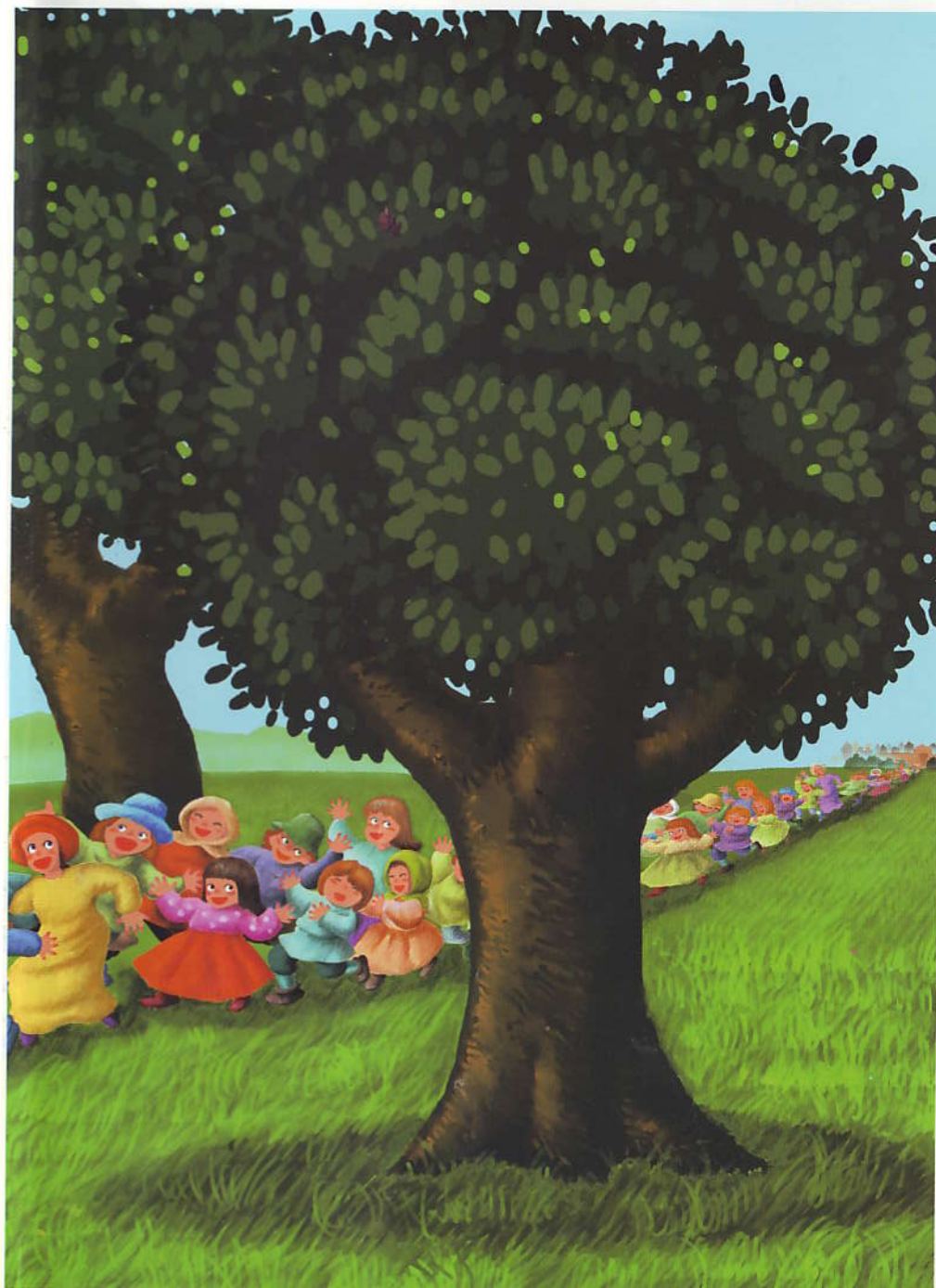


だんなさんがシャベルでほると、
金貨がぎっしりつまったかめがあらわれました。

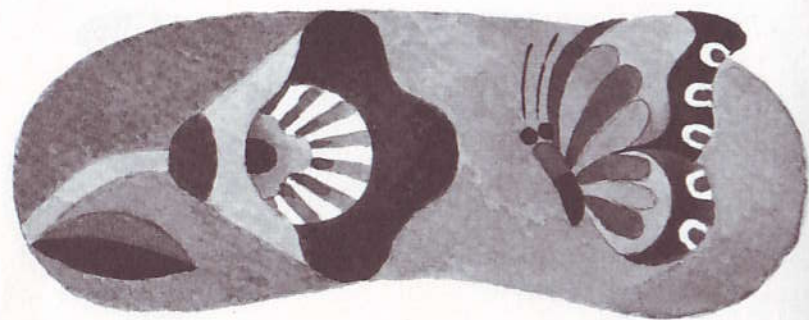


おしゃべりな おかみさん (118ページ)

子どもたちのぎょうれつは、町はずれにつき、山にはいりました。



子どもたちは、笛の音にひかれて、男のあとからついていきます。



もくじ

牛かいと おりひめ (中国) 6

ソロモンのちえ (イスラエル) 23

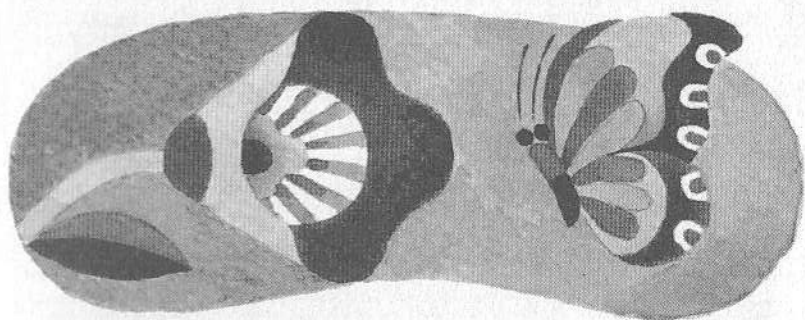
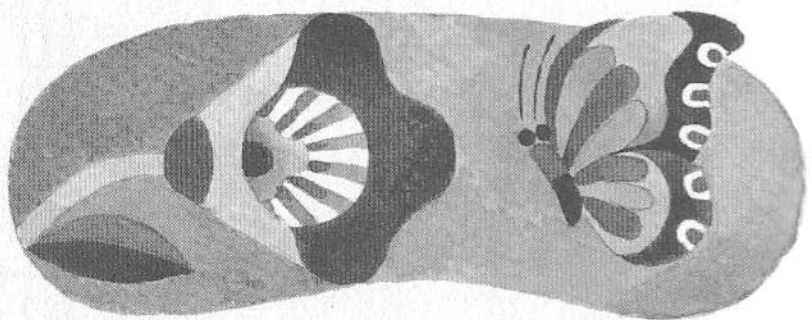
金色のつぐみ (フランス) 36

ガラスの山 (ポーランド) 57



牛かいと、おりひめとふたりの子どもとも、はなればなれになってしまいました。

牛かいと おりひめ (6ページ)



かささぎの かねつき (朝鮮) …………… 68

ふしぎな魚 (モロッコ) …………… 78

ハメルンの笛ふき (ドイツ) …………… 98

おしゃべりな おかみさん (ロシア) …………… 118

石の町 (イラン) …………… 137

ねこの大王 (イギリス) …………… 146

『世界のむかし話』について (解説) …………… 154

表紙・口絵・さし絵
 装丁・装画
 杉田 豊
 西岡りき

世界^せのむかし話^{ばなし}

二年生

ときありえ／編著^{へんちよ}



■編著者 ときありえ

東京に生まれる。上智大学中退。パリ大学文学部(ソルボンヌ)に留学。フランス語の翻訳、児童文学の創作などで活躍。翻訳に「ふたりぼっち」など、創作に「クラスメイト」「そよかぜ野菜村」「のぞみとぞぞみちゃん」(日本児童文学者協会新人賞)など多数。

■画家 西岡りき(にしおかりき)

北海道に生まれる。1968年からフリーのイラストレーターとして仕事をはじめ。雑誌を中心とした出版関係のイラストで活躍。CGをつかった教材開発にもとりくんでいる。さし絵の仕事に「スーパーキックグランパス」「こんにちは! ふしぎ日和」など多数。



牛かいと おりひめ

〈中国のおはなし〉

むかし、ひとりの牛かいのわかものがいました。にさんの家で、はたらいていましたが、にさんのおくさんにきらわれ、ある日、よぼよぼのめ牛といっしょに、おいだされました。

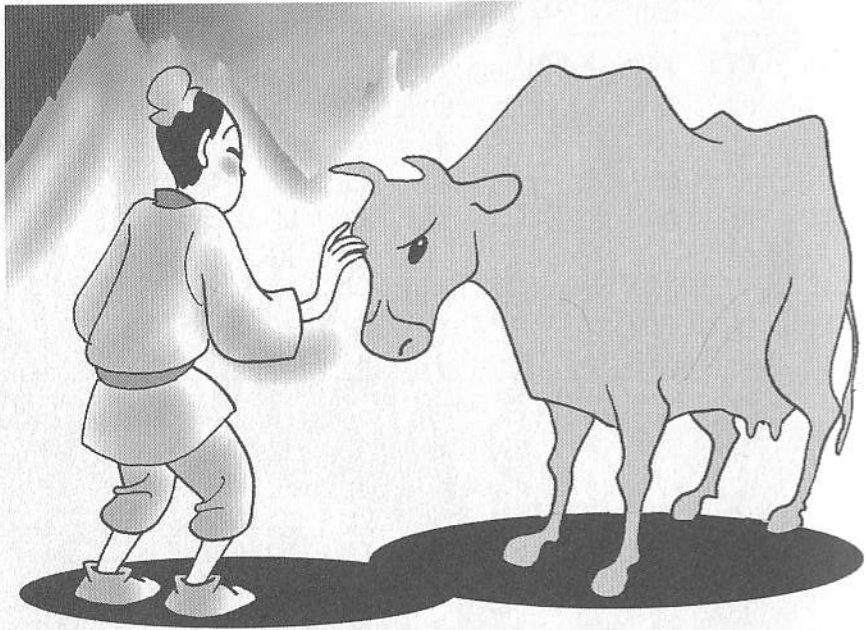
わかものが、とぼとぼあるいて、川のほとりまでくると、おどろいたことに、め牛が、口をききました。

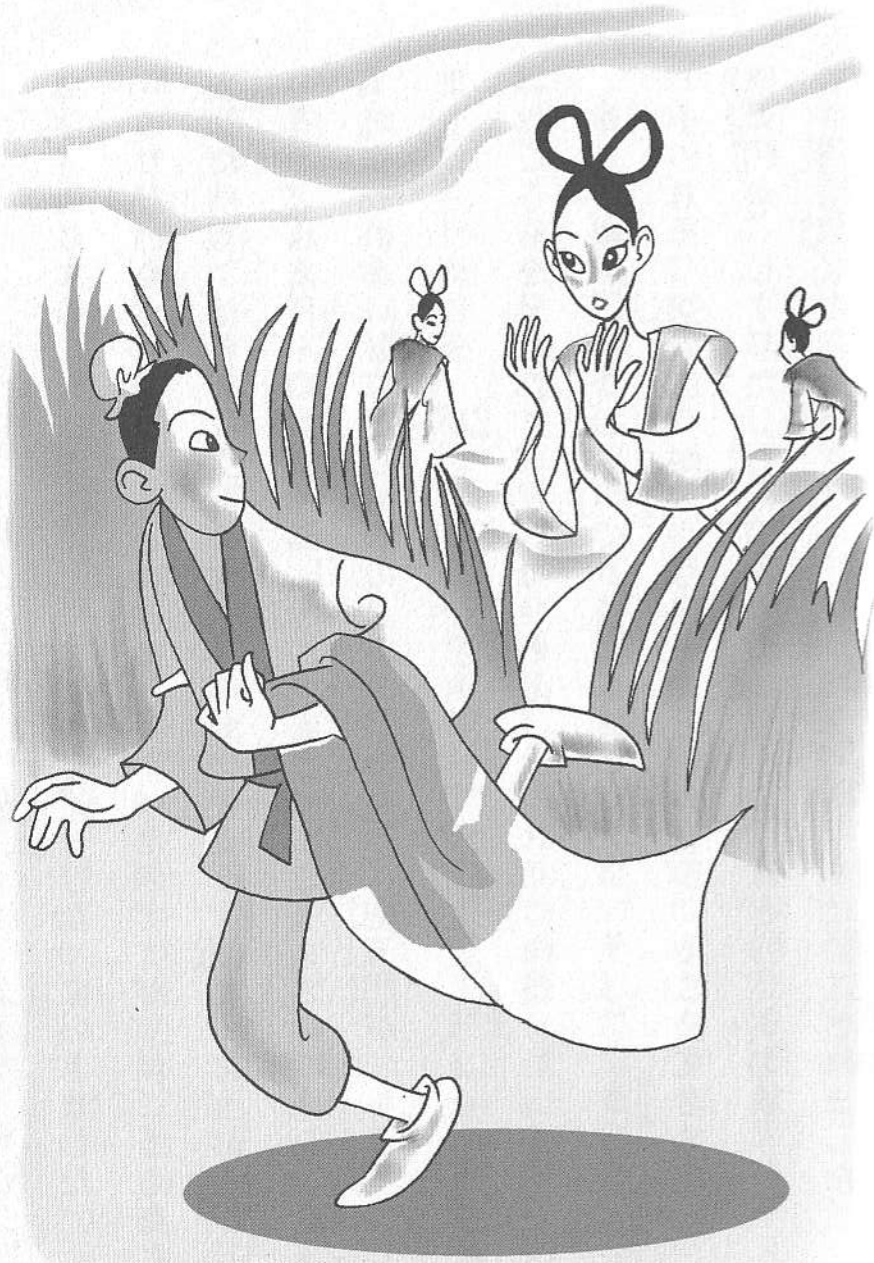
「あなたは、とてもよくしてくれたから、いいことを、おしえましょう。あした七月七日に、天の南天門があいて、七人の天女が、この川べりに

おりてきます。そしたら、すえのおりひめのはごろもを、とりあげなさい。はごろもは、けっして、かえさないように。こまったときには、わたしを、三どよびなさい。」

それだけいうと、め牛は、どこかへ、いってしまいました。そのぼん、わかものは、川べりで、ねむりました。

やがて、しらじらと夜があけ、





あたりがうす青くなってきたころ、わかものは目をさしました。

天の南天門が、ぎいーつとあいて、七々の白ぼとが、つきつきとびだすのが、見えました。はとは地上にむかっておりてくると、じゅんに川のほとりにおりたち、七人の天女にかわりました。そして、手ばやくころもをぬいで、せんたくをはじめました。

わかものは、あしのほかげからすえのおりひめに、そつとちかづきました。そして、うすぎぬのはごろもを、さつととりあげました。

「あつ、なにをするのです！」

おりひめが、気づいてさげびました。

「気のどくだが、これはかえせない。」

あねの天女たちはおどろいて、大あわてで、それぞれのはごろもをは

おり、たちまち もとの白しろぼにもどつて、とびたつていきました。

おりひめも もちろん とんでいきたかったのですが、はごろもをとられたので どうしようもありません。なきそうな顔かおで おろおろしてると、ねえさんの白しろぼとが 一いちわ、もどつてきて さげびました。

「おりひめ！ なにをしてるの。いそがないと、南なんてんもん天門が しまつてしまうわ。」

「はごろもをとられて、とべないの。」

おりひめが、かなしい声こゑで こたえました。

そのとき、空そらのほうから ぎいーつという音おとが きこえてきました。

南なんてんもん天門が、しまりだしたのです。ねえさんの白しろぼとは、矢やのようにとんで 門もんの中なかにきえ、おりひめは ひとり、川かわべりにのこされました。

「おりひめ、ここで わたしといっしょに くらしておくれ。」

わかものが、ねっしんにたのみました。はごろもがなくては天てんにかえれないおりひめは、ついにあきらめて、牛うしかいのつまとなりました。

牛うしかいは、川かわのそばに 小ちいさな家いえをたてました。そして、畑はたけをたがやしたり 牛うしをおったりして、かせぎました。おりひめは はたおりをして、できたぬのを 村むらにうりにいきました。やがて、子こどももふたり生まれて、しあわせな日ひびがつぎきました。

そんなある日ひ、おりひめが、おったぬのをとどけに、いつものように村むらにでかけていきました。牛うしかいは ふたりの子こをみていましたが、やがて、子こどもたちが ぐずりだしました。いくらなだめても、おかあさんんをさがしてなくばかり。



ところが、ぐずっていた子どもたちが きゆうになきやみ、家の天井をゆびさして、ここにこしはじめました。

「はて、なぜだろう……」

牛かいが 目をこらしてみると、天井からはごろものはしが のぞいています。この家をたてたとき、牛かいは 天井に はごろもをかくしたのでしたが、ねずみのしわざか、は

めいたがずれて、ころものはしが とびだしたのでした。

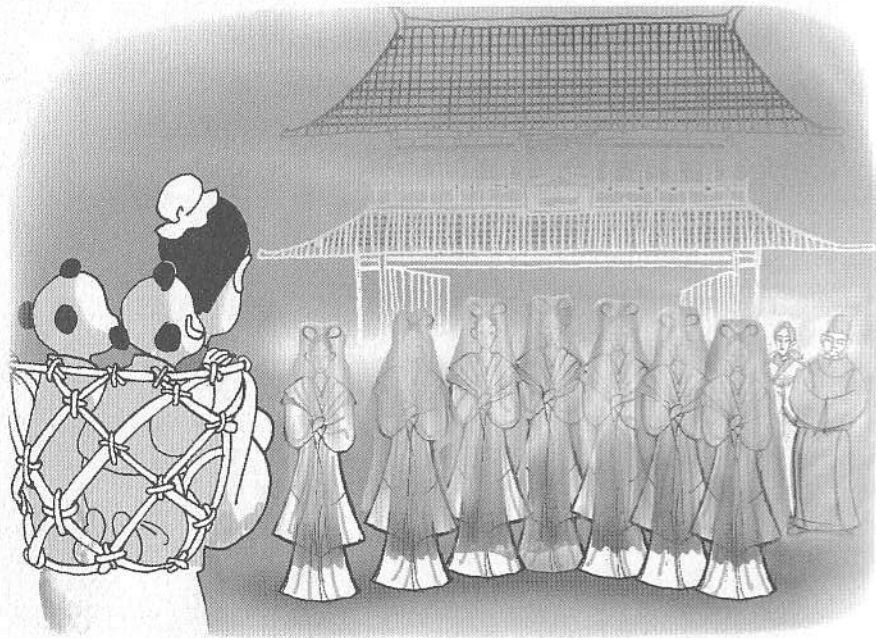
そのとき、げんかんの戸があく音がして、おりひめがかえってきました。牛かいは、あわてて はめいたをとじました。

でも、それからというもの、牛かいは おりひめのるすに 子どもがぐずると、天井からはごろもをひきだして あやすようになりました。

あるときのことです。おりひめのうでのなかで、子どもたちが うれしそうに 天井をゆびさしました。おりひめはふしぎにおもって 天井を見あげ、ぬのがとびだしているのに気づきました。台にのって はしをひっぱると、うすぎぬが、するすると できました。

「まあ！ これは、わたしのはごろもだわ。」

おりひめのさけび声をきいて、外にいた牛かいが、あわてて とびこ



つくりました。そのかごに
 たりの子どもをいれて かつぎ、
 ころもをはおると、からだがま
 えにのめって、あつというまに
 天てんについていました。
 南天門なんてんもんの入り口ぐちに、そろいの
 ころもをきた 七人しちにんの天女てんによが、
 顔かおにもうすぎぬをかけ、ずらり
 とならんで 立たっていました。
 すこしはなれて、天女てんによたちの
 父母ふぼも 立たっています。

んできました。おりひめは、夫おつとのまえで さつと はごろもをはおりま
 した。すると、もう 人ひとがかわったようになって、子どもたちには目めも
 くれず、そのまま天てんにかえっていつてしまいました。
 牛うしかいはい、あまりのことに 声こえもでませんでした。が、つぎのしゅん
 かん、め牛うしのことばをおもいだし、大いそぎで め牛うしを三どさん よびまし
 た。すると、たちまち あのみ牛うしがあらわれました。
 「では、わたしのかわでころもをつくり、ほねでかごをつくりなさい。
 かごに子どもたちをいれて かつぎ、ころもをはおれば、天てんにのぼって
 いけますよ。」
 め牛うしはそれだけいうと、どつとたおれて死しにました。
 牛うしかいはい、死しんだ牛うしのかわをはいで ころもをつくり、ほねでかごを

「どれがおまえのつまか、あてなさい。」

天女たちの母が、いいました。

牛かいがこまっっていると、せなかのかごから 子どもたちがとびだしました。そして、ひとりの天女のまえに かけていき、

「おかあさーん！」

と、だきつきました。

「つまは、この人です。」

牛かいがいうと、もちろん、それがおりひめでした。

つぎに、おりひめの父が いいました。

「こんどは、わしのぼんだ。おまえがわしからにげおおせれば、天でく
らしてよい。だが、つかまったら、地上にもどるのだぞ。」

牛かいが またもや こまっっていると、おりひめが おわんと はし
と かんざしを そつとわたして いいました。

「おいつかれそうになったら、はじめにおわんを つぎにはしを なげ
なさい。わたしが『はやく！』といったら、かんざしで、ゆく手に せ
んをひくのです。いいですか、くれぐれも ゆく手ですよ。」

そこで、牛かいは、おわんと はしと かんざしをもって、かけだし
ました。

牛かいがにげ、おりひめの父がおいます。牛かいは、たちまち おい
つかれそうになりました。牛かいが うしろにむけて おわんをなげる
と、おりひめの父が かがんで それをひろったので、すこしあいだが
あきました。

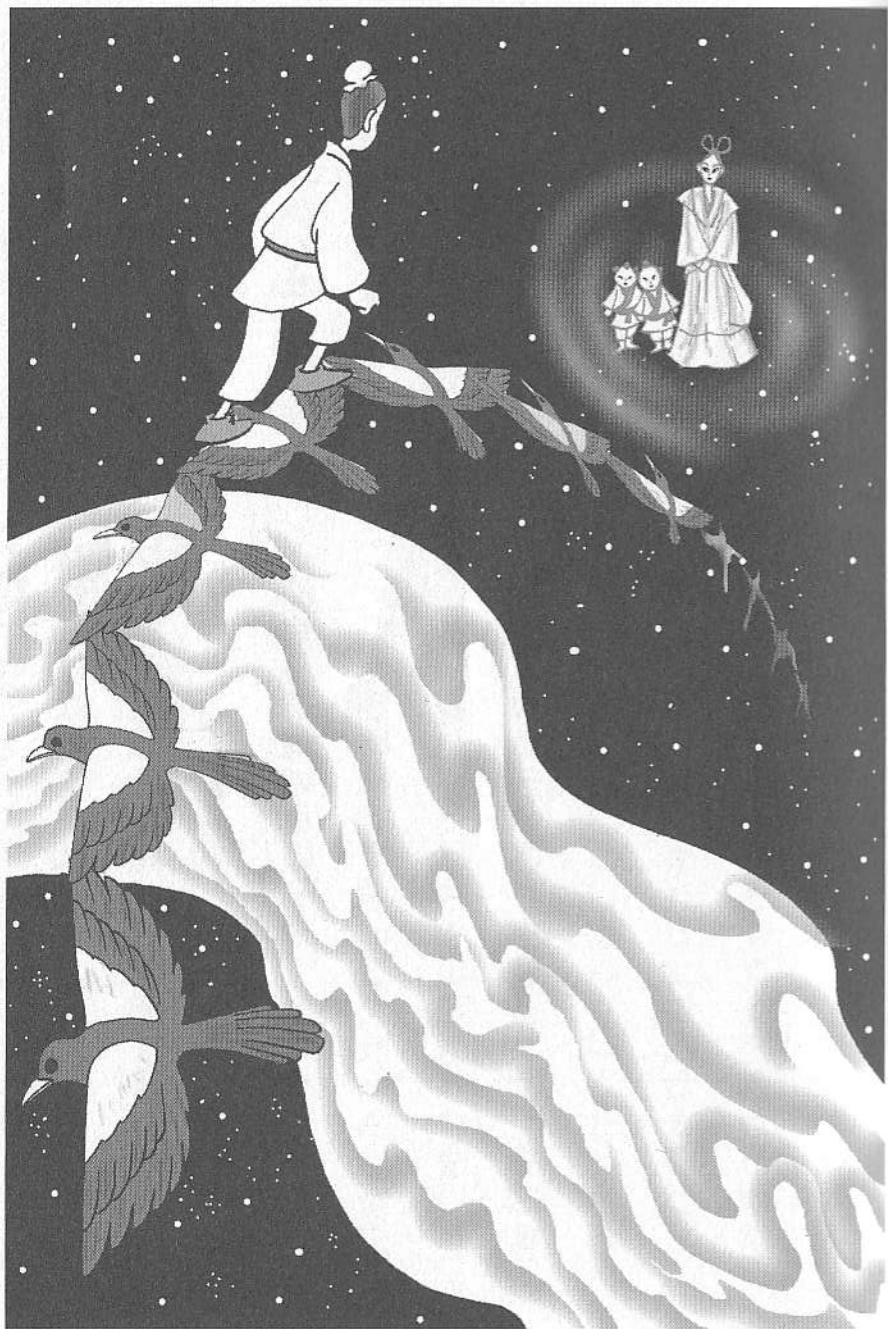


でも、またすぐに おいつかれそうになりました。そこで、こんどは
はしをなげると、はしが林はやしにかかりました。おりひめの父ちちは、木きぎをな
ぎたおして すすまなければならず、またすこし あいだがあきました。
でも、すぐにまた おいつかれそうになりました。すると、おりひめ
のさけぶ声こゑがきこえました。

「はやく！」

牛うしかいは、おりひめにいわれたとおり かんざしで空くうちゆう中に せんを
ひきました。ところが、あまりあわてたので、ゆく手てではなく うしろ
にひいてしまいました。

せんは、見るまに しぶきをあげる川かわにかかりました。これで、おい
つかれるしんぱいはなくなりましたが、おりひめとふたりの子こどもとも、



はなればなれになってしまいました。

「なんということだ。ゆく手ではなく うしろにせんをひいたばかりに、二どと みんなと くらせなくなってしまった……」

牛かいはい、声をあげてなきました。

すると、一わのかささぎがやってきて、牛かいにいいました。

「七月七日がきたら、この川のほとりに いらっしやい。もし、その日の夜空がはれていたら、わたしたちがはねをつないで かささぎのはしをつくり、むこうぎしに わたしてあげましょう。」

そんなわけで、牛かいは 年に一ど、川をわたって おりひめと子どもたちに あいにいけることになりました。

でも、雨がふれば かささぎのはしはかからないので、つぎの年の七

ソロモンのちえ

〈イスラエルのおはなし〉



月七日まで、また一年 がっなか いちねん またなければなりません。

七月七日のたなばたには、はれた夜空をあおいで しちがっなか よぞら みみ 耳をすましてごらんなさい。

「なぜ、ゆく手でなく うしろにせんをひいたの……」という おりひめのかなしいつぶやきが きこえてくるはずです。

ダヴィデ王が、国をおさめていたところのことです。王のけらいたちが、見まわりにでかけました。町をでてしばらくいくと、きれいな丘がありました。ちょうどお昼になったので、しきものをしいてすわり、もってきたべんとうをひらきました。

「うまそうな ゆでたまごだな。ふたつばかり わけてくれよ。」
あごひげのけらいが、ゆでたま

ごをほおぼっている 口ひげの
けらいに たのみました。

「いいよ。あとで かえしてく
れるならね。でも、そのときに
は、たまごの『実』もいっしょ
に かえしておくれ。」

あごひげのけらいは、たまご
の実とはなんだろうと おもい
ましたが、ふかくかんがえずに
こたえました。

「わかった。そのときには、そ

れもいっしょに かえすよ。」

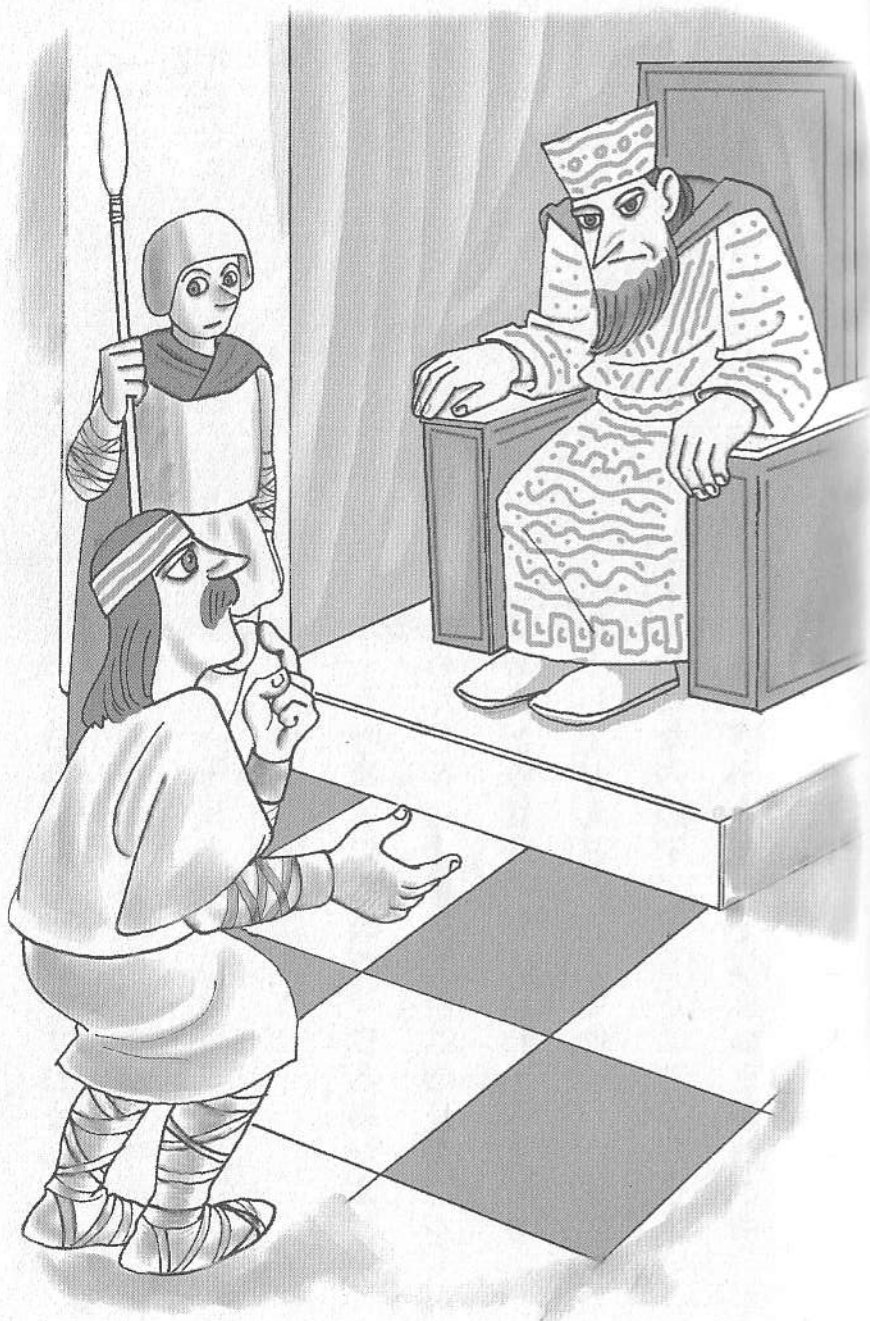
そこで、口ひげのけらいは ゆでたまごを ふたつわたし、あごひげ
のけらいは、大よろこびで それをたいらげました。

さて、見まわりからかえると、あごひげのけらいは、たまごをかえす
というやくそくを すっかりわすれてしまいました。口ひげのけらいも、
それきり なにもいいませんでした。

それから七年がたったある日、あごひげのけらいは、とつぜん やく
そくをおもいだしました。そこで、たまごを二こかかえて、あわてて
口ひげのけらいの家に 走りました。

「すまんすまん。やくそくを すっかりわすれていたよ。」
すると、口ひげのけらいが、むっとした顔でいいました。





「それでは、やくそくをはたしたことはないよ。」

「それでは とは、どういうことだ？」

「かえすときには たまごの実^みもいっしょと、いったはずだ。それなしには うけとれないね。」

「たまごの実^みだなんて、わけがわからん。うけとらないなら、すきにし
ろ！」

あごひげのけらいが、そういつてかえってしまったので、口^{くち}ひげのけ
らいは、あごひげのけらいを ダヴィデ王^{おう}にうったえました。

「ダヴィデ王^{おう}さま。あごひげの男^{おとこ}ときたら、七年^{しちねん}まえにかしたたまごを
いまごろ かえしにきたばかりか、やくそくのたまごの実^みも もってこ
ないのです。」



あごひげのけらいが、なきながらかえっていくと、家のちかくの道で 子どもたちがあそんでいました。

子どものひとりが、あそびをやめて 男にたずねました。

「あごひげのおじさんは、なぜないているの？」

「子どもに、わかるものか。」

「もしかしたら、わかるかもしれないよ。」

そこで、ダヴィデ王が、あごひげのけらいをよんで たずねました。

「おまえは、口ひげのけらいに、ふたつのたまごとその実をかりて 七年になるというが、ほんとうか？」

「はい、ほんとうです。」

「たまごの実とは もとのたまごが うむはずのものだ。二このたまごは 二わのめんどりになり、二わのめんどりは 年に二百このたまごをうむ。二百このたまごは 二百わのめんどりになり、二百わのめんどりは 二万のたまごをうみ……と、こうしてどんどんふえてゆく たまごの実の七分分を、おまえは かえさねばならぬぞ。」

それをきいて、あごひげのけらいは びっくりしてしまいました。そんな数のたまごなど、とてもかえせるものではありません。

その子の目が、それはかしこそうだったので、あごひげのけらいは、ふと、きいてみる気になりました。そこで、たったいま下くだされたダヴィデ王おうのさばきを はなしました。

「……というわけで、おれは、気がとおくなるほどの数かずのたまごをかえさなくてはならないんだ。でも、そんなのはむりだから、ろうやにぶちこまれるよ。」

すると、その子こが にっこりわらって たずねました。

「おじさんがかりたのは、ゆでたまごだったんだね？」

「ああ、そうだよ。」

「なら、こうしたらいいよ。もうすぐ、ダヴィデ王おうのぐんたいが ここをとる。おじさんは、そのあき地ちをたがやして、にまめをまいてい

るんだ。」

「にまめ？ そんなのをまいても、めはでないよ。」

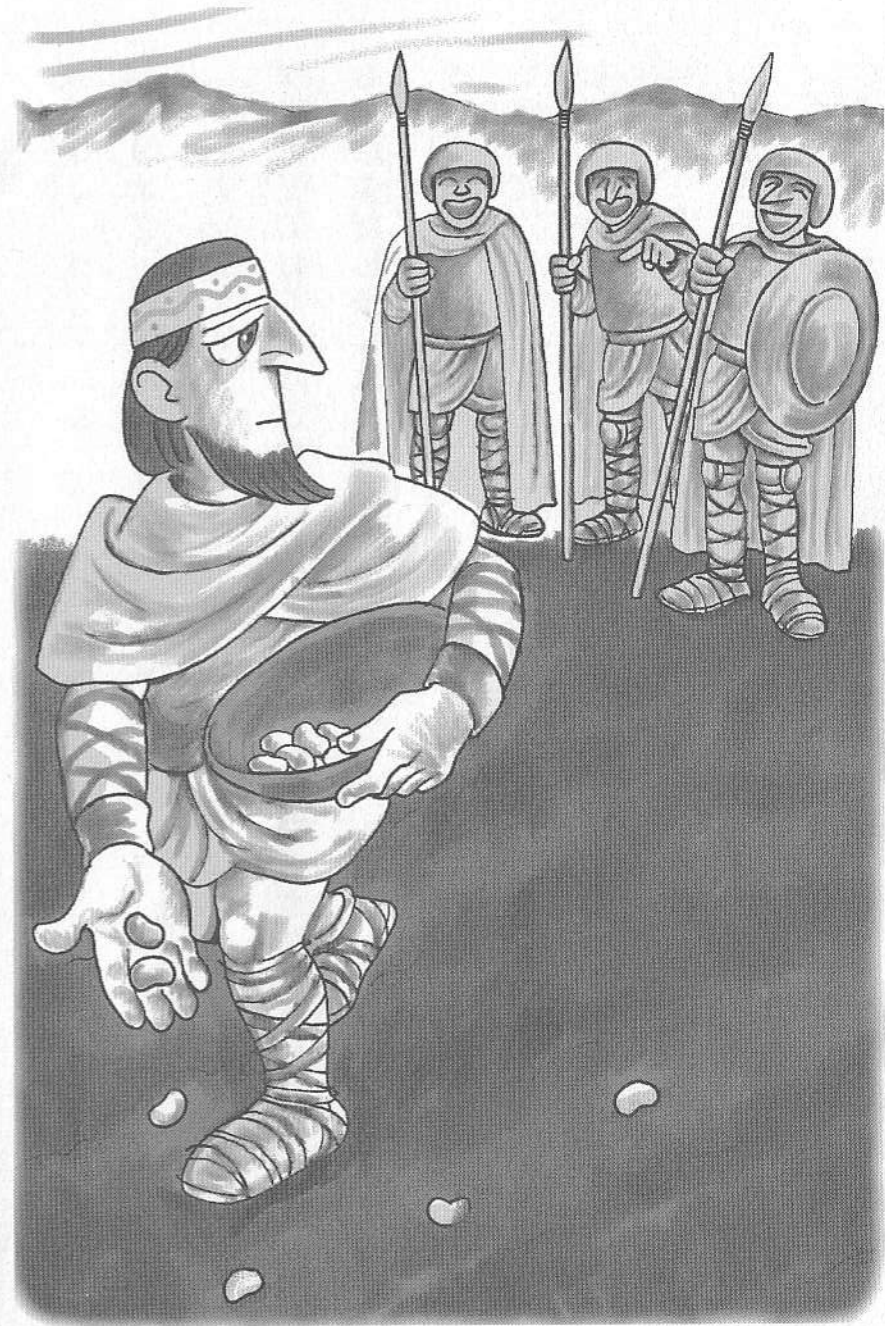
「へいたいたちも、きつとそういうよ。そしたら、こういうんだ。『ダヴィデ王おうのおことばどおり、ゆでたまごが ひよこをうむなら、にまめも めをだしましょう。』」

男おとこの子はそういうと あそびなかまと どこかにいってしまいました。そこで、あごひげのけらいが、おしえられたとおり、あき地ちをたがやし にまめをまきはじめると、へいたいたちが やってきました。

「おい、男おとこ。そこでいったい なにをしている？」

「にまめを まいているんです。」

「ばかな！」



へいたいたちは、げらげら わらいました。そこで、あごひげの
けらいは、男の子におしえられたとおり いました。

「ダヴィデ王のおことばどおり、ゆでたまごが ひよこをうむなら、に
まめも めをだしましょう。」

「この男は、なにをいつているんだ？」

「ふざけてるのか？」

「ダヴィデ王に もんくをつける気か？」

へいたいたちが わいわいだし、さわぎは ダヴィデ王の耳にも
とどきました。そこで、ダヴィデ王が 男をよびつけてみると、それは
さきほどさばきをくだした あごひげの男でした。

ダヴィデ王が、ははーんという顔で いました。



「たしかに。だが、いったいそれがそれをおしえたのだね？」
「わたしが じぶんで、かんがえたのです。」

「いや、そうではあるまい。かならず、入れ知恵したものがないはずだ。それは もしかして、わしのむすこの ソロモンではないかな？」

ダヴィデ王は そういうと、
むすこをよびにやらせました。

しばらくして、あのかしこそうな目の男の子が、へいたいたちにつれられて あらわれました。

ダヴィデ王が、ほこらし気にいました。

「むすこよ！ そなたが さらにかしこくなるよう、いのろうぞ。」
つぎに ダヴィデ王は、あごひげのけらいにむきなおって つづけました。

「おまえは、口ひげの男に、ゆでたまごをふたつだけ かえせばよい。」
ゆでたまごのさばきは、こうしておりました。



金色きんいろのつぐみ ヘフランスのおはなし

むかし、ひとりの王さまおうがいました。王さまには、三人さんにんの王子おうじがありました。あるとき、王さまおうが病気びょうきにかかり、国くにじゅうの医者いしやがよばれましたが、だれひとり なおすことができません。すると、見みしらぬ男おとこがやってきて いいました。

「王さまおうのやまいをなおせるのは、金色きんいろのつぐみだけです。」

男おとこは、それだけいうと すぐに 立ちたさりました。

そこで、王さまおうは、上うえの王子おうじを まくらもとによびました。

「金色きんいろのつぐみを、さがしに
いってはくれまいか。うまく見み
つけてもどってきたなら、この
しろをゆずろう。」

「ほんとうですか？ では、ま
かせてください。」

上うえの王子おうじは、いさんでしゅつ
ぱつしました。

しろをでて しばらくいくと、
四よっつじにいきあたりました。

「さて、どっちにいかうかな？」





上の王子は 空中にぼうしをほうり、おちた道にすすみましました。

でも、いくらいっても、金色のつぐみは どこにもいません。上の王子はうんざりして、ちかくのやどに はいりました。

やどでは、男たちが、ゆかいに さかもりをしていました。それを見て、上の王子は、つぐみをさがすなんて ばからしくなりました。

「父上が死ねば、どのみち、ざいさんは もらえるんだ。べつに、くろうして 金色のつぐみを さがすことはないよ。」

そこで、さきの道をいくのはやめて、やどのなかまと のんだりたべたり、ゆかいに すごしはじめました。

しろでは、みんなが、上の王子のかえりを 首をながくして まって いました。でも、なん日たっても 王子がかえらないので、とうとう、

中の王子が しゅっぱつしました。

中の王子が しろをでて しばらくいくと、やはり四つじにいきました。中の王子も、おなじようにぼうしをなげ、おちた道をすすんでいきました。すると、一けんのやどがありました。

やどでは、男たちが にぎやかにさかもりをしていました。よく見ると、なんと上の王子がいるではありませんか。

すると、上の王子も 中の王子に気づき、やどの中から さそいました。

「おい、弟！ ここでいっしょに、ゆかいにすごそうじゃないか。」

中の王子も、つぐみをさがして たびをつづけるより、やどであそびくらしたほうがいと おもいました。

「そうだね。どのみち、ざいさんは もらえるんだもの。」

そこで、中の王子も、さかもりのなかまに くわりました。

さて、上の王子と中の王子が そろってかえらないので、いよいよすえの王子が しゅっぱつしました。

すえの王子も、おなじ道をたどって 四つじにでました。ぼうしをなげて道をきめ すすんでいくと、やどにいきました。そこで、上の王子と中の王子に 声をかけられました。

「おい、弟！ ここでいっしょに あそびくらそう。」

すえの王子は、びっくりしました。父の病気をなおすために しろをでたのです。こんなところで さかもりをしているひまはありません。

「とんでもない！ いっこくもはやく、金色のつぐみを見つけないりや。でないと、父上は死んでしまうよ。」



すえの王子は、にいさんたちにきっぱりわかれをつけて、どんだんすすんでいきました。でも、金色のつぐみはどこにもいません。すえの王子が、それでもさらにすすんでいくと、目のまえに 小さなうさぎがあらわれました。

「そんなにいいそれで、どこにくの？」

「金色のつぐみをさがしにさ。」

「気のどくだけど、百年かかってもいきつかないよ。」

「なんだって？」

すえの王子は がっかりしたのと つかれとで なきだしてしまいました。すると、うさぎがいました。

「でも、だいじょうぶ。このぼくは、ひとはねで七里すすむ うさぎなんだ。せなかにおのりよ。ぼくが、つれていってあげよう。」

小さなうさぎの、そのまた小さなせなかにのるなんて、とうていむりようでした。でも、おもいきってとびのると、さっとけしきがうごいて、あっとおもうまもなく もう、りっぱなしろのまえに ついていました。



「金色のつぐみは、しろの小屋の中だよ。つぐみのかごのよこに 金のかごがあるけど、つぐみを うつしかえたりしないようにね。」

うさぎはそういうと、どこかにきえました。

さて、すえの王子が 小屋にしのびこむと、よごれたかごの中に、それはうつくしい 金色のつぐみがいました。

「ああ、おまえだね！ さあ、いつしよにきておくれ。」

と、すぐそばに 金のかごが見えました。金色のつぐみに ぴったりです。すえの王子は うさぎのいったことをわすれて、ついふらふらと、つぐみを 金のかごに うつしかえてしまいました。

とたんに、つぐみが さえずりだしました。すると、外が きゆうに さわがしくなって、小屋の戸があきました。

「だれだ？ でてこい！」

すえの王子は 番人につかまって、しろの大臣のまえに ひったてられていきました。

「ごめんなさい。病気の父のために、どうしても 金色のつぐみが ほかにかつたのです。」

すえの王子が あやまると、大臣がいました。

「ラ＝ボルスレーヌをつれてきたら、金色のつぐみをわたそう。」

そんなわけで、すえの王子は ろうやにほうりこまれるかわりに、しろの外に ほうりだされました。

すえの王子は わけがわからず、すっかりとほうにくれてしまいました。すると、ふたたび あの小さなうさぎが あらわれました。

「なにをそんなに こまっているの？」

「金色のつぐみをもらうために、ラ＝ボルスレーヌをつれてこなけりやならないんだ。でも、いったい どこにいけばいいんだろう？ そもそも、ラ＝ボルスレーヌがだれかさえ、わからないんだ。」

「きみは、つぐみをうつしかえたね？」

うさぎが、おどろいてたずねました。すえの王子は、かなしそうにうなずきました。すると、うさぎがいました。

「でも、いまとなってはしかたがない。ぼくのせなかにおのり。」

そこで、すえの王子が、小さなせなかにとびのると、さっとけしきがうごいて、とたんに こんどはみずうみのほとりに ついていました。

「ラ＝ボルスレーヌは このちかくにすむ むすめだよ。いまに、ここ



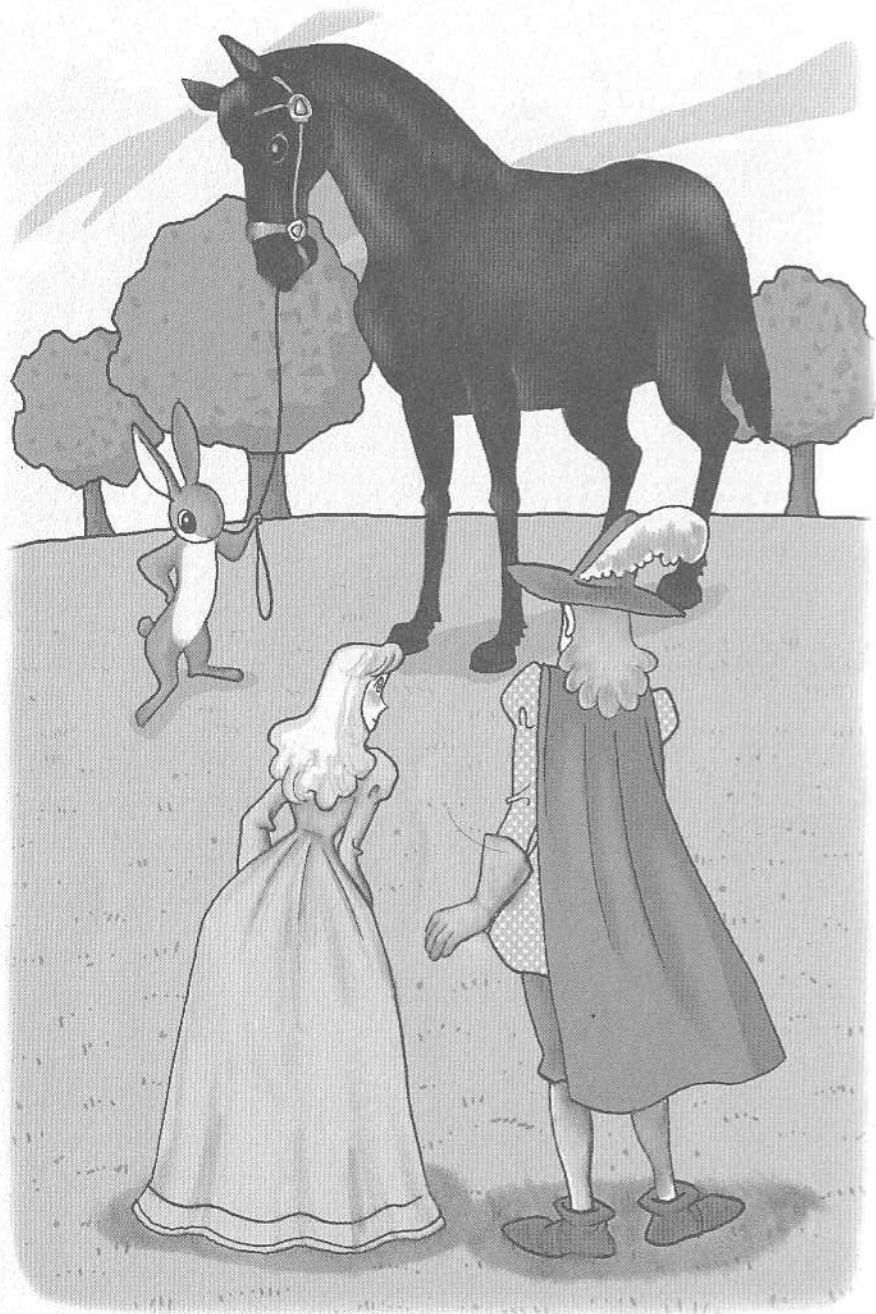
に水あびにくる。そしたら、あの子のふくをかくすんだ。ラッボルス
レーヌが きみについてくるといったら、かえしておやり。」

小さなうさぎは、そういって いなくなりました。

すえの王子が あしのほかげに かかれていると、村のむすめたちが
やってきました。ひときわうつくしいのが ラッボルスレーヌでした。
むすめたちが 水あびをはじめたので、すえの王子は、ラッボルスレー
ヌのふくを そっとかくしました。

水からあがったむすめたちが、ラッボルスレーヌのふくがなくなつた
のをしって、さわぎだしました。みんなは、しばらくがやがやしていま
したが、やがて、ラッボルスレーヌをおいて かえっていききました。

のこされたラッボルスレーヌは、しくしくなきだしました。そこで、



すえの王子は、ラッボルスレーヌのまえに そつと すすみでました。
「こんにちは、ラッボルスレーヌ。ぼくは すえの王子だ。ぼくについでくるなら、ふくをかえすよ。」

ラッボルスレーヌが、こつくりうなずいたので、王子は ふくをかえしてやりました。すると、そこにまた あの小さなうさぎが、黒い馬をひいて あらわれました。

「これは、はや足の黒馬さ。この馬にのつて、さつきのしろに もどるんだ。こんどこそ、つぐみは うつしかえないようにね。そしたら、つぐみもむすめさんも、つれてかえられるよ。」

そこで、すえの王子が ラッボルスレーヌといっしょに黒馬にとびのると、さつとけしきがうごいて、たちまち 金色のつぐみのいるしろに

もどっていました。

すえの王子は ふたたび小屋にしのびこみ、こんどこそ 金のかごには目もくれず、金色のつぐみのはいった よごれたかごを もちだしました。そして、ふたたび黒馬にとびのりしました。すると、また けしきがさつとうごいて、とたんに はじめのやどのまえにもどってしまいました。「ここまでくれば、だいじょうぶ。」

すえの王子は 黒馬からおり、にいさんたちをよびました。そして、ラッボルスレーヌと四人で、父のしろにむけて かえりはじめました。一行が 川べりにさしかかったときです。上と中の王子は しめしあわせて、すえの王子を 水につきおとしました。そして、金色のつぐみと ラッボルスレーヌをつれて、なにくわぬ顔で もどっていききました。



すえの王子が 水底にしずむと、またもや あのうさぎがあらわれて、王子を きしにひきあげてくれました。

「さあ、しろにもどって 眞実をしらせなさい。でも、身分をあかすのは さいごですよ。でないと、にいさんたちが またなにをするか わかりません。」
小さなうさぎは はげますように つづけました。

「ラ＝ボルスレーヌは 口をきかずに あなたをまっていますよ。」
そこで、すえの王子は 馬番にへんそうして しろにもどりました。
そして、王子とはしられずに、しろにはいりました。
しろでは、上と中の王子が 金色のつぐみをもちかえった話で もち
きりでした。はや足の黒馬と ラ＝ボルスレーヌというきれいなむすめ
をつれかえったが、黒馬はけとばすばかり、つぐみはまるでなかず、
むすめも口をきかないとのこと。ところが、新入りの馬番が、その黒馬
を たちまち手なずけてしまったのです。

おどろいた王さまが、まくらもとに馬番をよびつけて たずねました。
「馬番よ。べつのきせきも おこせないだろうか。上と中の王子は、た
しかに 金色のつぐみをつれてかえった。だが、ひと声もなかないのだ。

それで、わしのやまいは なお
らないのだよ。」

王さまのへやに 金色のつぐ
みがはこばれました。つぐみは、
馬番を見るなりなきだして、王
さまの病気は いっぺんで な
おってしまいました。

馬番が きていたふくをぬぎ
すてて かけよりました。

「父上！ わたしは すえの王
子です。」



ガラスの山^{やま}

〈ポーランドのおはなし〉



ラッボルスレーヌも はじめて口をひらいて、すえの王子のかつやくと、兄たちの悪事を はなしました。

「いまこそ、すべてがあきらかになった。むすこよ、よくぞわしのやまいをなおしてくれた。」

王さまとすえの王子は、しっかりと だきあいました。

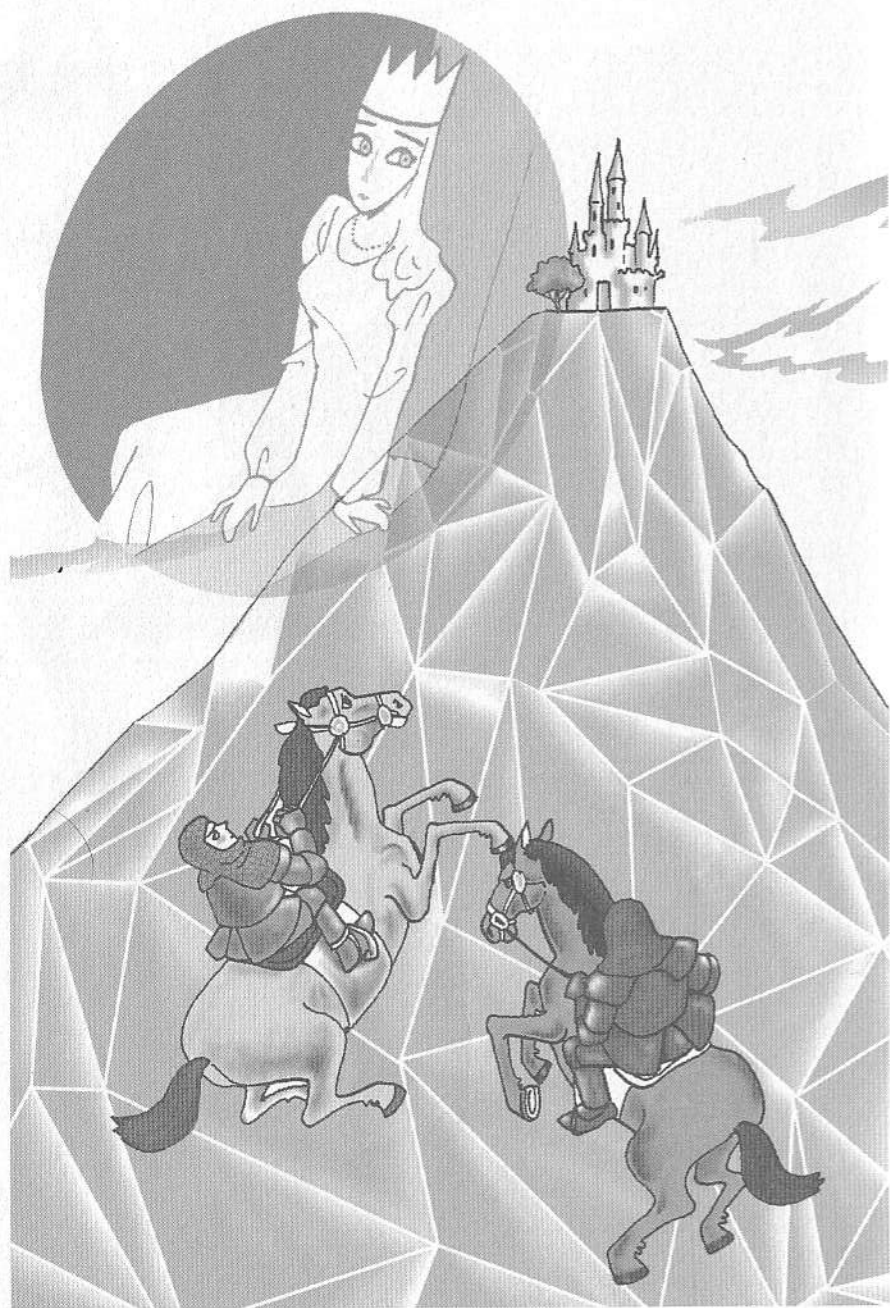
上と中の王子は、悪いおこないのむくいをうけて しろをおわれました。すえの王子は あたらしい王となり、ラッボルスレーヌとけっこんして、すえながく しあわせにくらしたということです。

むかしむかし、北のはずれの国に 金のしろがありました。

このしろは、ほかのどんなしろとも ちがっていました。なにしろ、ガラスの山のとっぺんにたっているのです。

しろのには、金のりんごのなる木があつて、その実をもいだものだけが、しろの中にはいることができました。

りんごの木には 大わしがいて、



ちかづくものの目を えぐってやろうと ねらっていました。

金のしろの銀のへやには、この国の王女が もう 長いこと のろいをかけられて とじこめられていました。

王さまは、王女をすくいだしたものに この国と王女をあたえる、というおふれをだしていました。

これまでも たくさん騎士が しろと王女を 手にいれようと やってきました。王女はまどべにすわり、りっぱな馬にのってのぼってくる騎士を 見おろしていましたが、どんな騎士も つるつるすべるガラスの山には かないません。

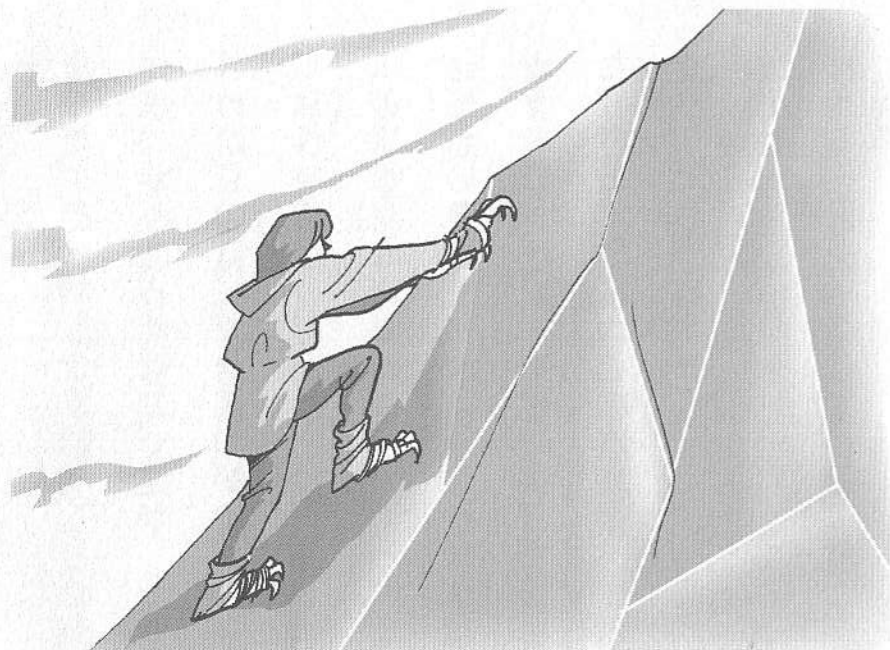
おおくの騎士が 馬とともに 谷底にころがりおちて死に、さいごは ほねになりました。ほねは、よろいの中で さやの中のかわいた豆のよ

うに カラカラとなりました。

王女おうじよが 銀ぎんのへやにとじこめられて、あと一日いちにちで七年しちねんになるという日ひのことです。ひとりのわかものが、ガラスの山やまのふもとに やつてきました。

わかものは よろいかぶともきていず、りっぱな馬うまにも のつていません。よくわらう やさしい青年せいねんで、とらわれの王女おうじよを すくいだし、このうでにだいて つれてかえりたいという 気きもちのほかには なにひとつ もっていませんでした。

わかものは、もってきた やまねこのつめを 手てと足あしにしぼりつけ、一歩いっぽまた一歩いっぽと のぼりはじめました。やまねこのつめが ガラスにくいこんで、つるつるすべるのを ふせいでくれます。



わかものは もくもくとのぼりつづけましたが、お日ひさまがしずみかけても、まだ 山やまの半はん分ぶんにもとどきません。

上うえを見れば、雲くもにかすむ ガラスのがけ。下したは、目めもくらむ谷たに。ときおり、死しんだものたちのおいが たちのぼっては、わかものをくるしめました。

わかものはつかれ、きずだらけの手足てあしから 血ちがながれだし

ました。それでも まだ、しろのかげすら見えません。やがて、あたりはすっかりくらくなり、星が チカチカまたたきだしました。

わかものは、ガラスのがけに しがみついていますでしたが、もうこれいじょう のぼっていく力は ありませんでした。ガラスの山のまん中で、このまま息たえるかに おもわれました。

と、いきなり つよいねむ気がおそってきて、わかものは首をたれ、ガラスのがけに せみのようにとまったまま ねむりこんでしまいました。でも、やまねこのつめが ガラスにしつかりくいこんでいたので、すべりおちずにすみました。

どのくらいたったでしょうか。わかものは、バサバサという音に、はっと 目をさました。わしが、りんごの木をはなれて 夜の見ま

わりにでたのです。わしはわかものを見つ、目をえぐってやろうとおりにきました。わかものは、わしの力をかりてやろうと まちかまえました。

わしが、わかもののかたに するどいつめを つきたてたとたん、わかものは、りょう手で わしの足を、さつとつかみました。おどろいたわしは、そのままいあがり、金のしろにもどって行って、しろの上をぐるぐる まわりはじめました。

月の光にてらされて、金のしろが かがやいています。銀のへやのまどべに 王女がすわって、かなしそうに 下を見おろしていました。

わかものは 手をはなして、ナイフをひきぬきました。かたがひどくいたみましたが、くいこんだつめのおかげで おちることはありません。



わかものは すきをうかがい、
わしが りんごの木の上^{うえ}にきた
とき、わしのりよう足を すつ
ぽり きりおとしました。

わしは、足^{あし}から 血^ちをながし
てとびさり、わかものは りん
ごのえだにひっかかりながら
地面^{じめん}におちました。

しろのにわに立^たったわかもの
は、かたにくいこんだままのわ
しのりよう足^{あし}を ばしつとひき

ぬきました。きず口^{ぐち}から 血^ちがふきだしましたが、金^{きん}のりんごをもいで
そのかわをはると、きずは いっぺんでなりました。

わかものは りんごを手^てにして 銀^{ぎん}のへやのとびらをあげました。

王女^{おうじよ}が、にっこりわらって でむかえました。

「ほんとうにありがとう！ これで、わたしはこのへやをでて、どこへ
でも すきなところへいけます。」

「では、どうぞ、ぼくのうでの中^{なか}に きてください。」

王女^{おうじよ}は りんごをうけとり、ふたりは しつかりと だきあいました。

そのとき、ガラスの山^{やま}のふもとで、どよめきの声^{こゑ}が あがりました。

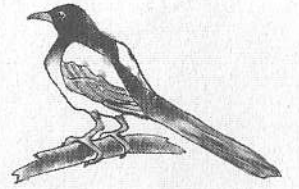
わかものと王女^{おうじよ}は、まどべに かけよりました。

「やあ、たくさんの人^{ひと}が あつまっている。」



「なにが、おきたのかしら？」
王女が 銀のふえをふくと、
つばめが とびこんできました。
王女は つばめに ガラスの
山のふもとで なにおきたか
見てくるよう いったけました。
つばめは いなびかりのよう
におりていき、たちどころにも
どってきました。
「大わしの血が、谷底のほねに
かかって、騎士たちが生きかえ

り、目をさましたばかりの人のように あたりを見まわして、よろこんでいるのです。そればかりではありません。それをした人びとが、あたらしい王さまをいわって かん声をあげているのです。」
あたらしい王さまとは、もちろん わかものことでした。
ふたりは、国じゅうの人にしくふくされて けっこんし、いつまでも しあわせにくらしたということです。



かささぎのかねつき

〈朝鮮のおはなし〉

むかし、ひとりの男が さびしい山道を あるいていました。男は、みやこにいった 役人のしけんをうけ えらくなろうと、いなかの村から でてきたのです。

男は、これからさきのことをかながえながら もくもくと あるいて いましたが、ふとするどい鳥の声を耳にして、上を見上げました。

「おっ、あれは……」
木の上の巢に 大蛇がはいりこみ、二わのかささぎをしめあげてい

ました。

男は、とつさに弓をかまえて、矢をはなちました。矢はみごと 大蛇の頭に命中し、大蛇は かささぎをはなして 木からおちました。

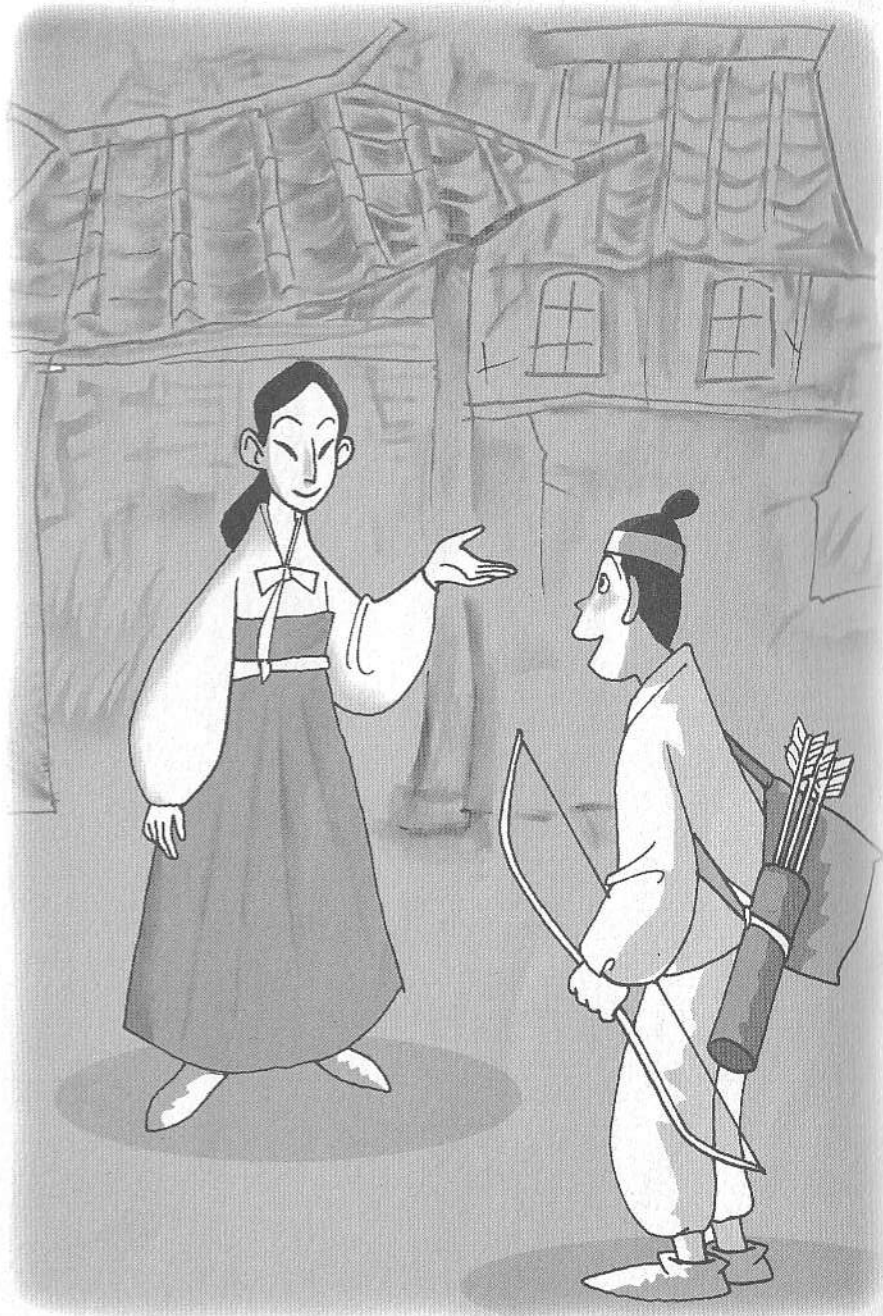
いのちびろいした二わのかささぎは、うれしそうに ひと声なくと、空高く とびさっていきました。

男は さらに足をはやめました。いけどもいけども山で、おまけに日はおち、あたりは くらくなってきました。

「これはこまった。夜になってしまおうぞ。」

男は、一夜のやどはないかと、さらに道をいそぎました。すると、はるかむこうに、あかりが見えてきました。

「おお。どうやら人家らしいぞ。やれ、たすかった。」



ちかくまでいってみると、そこは あれはてた古寺ふるでらでした。どこかぶ
きみなので、男おとこは いっしゅんためらいましたが、おもいきって戸とをた
たくと、色白いろしろの女おんなが できました。

「夕ゆづぐれまでに とうげをこえようとしたが、夜よるになってしまった。ど
うか ひとばん、とめてくれませんか。」

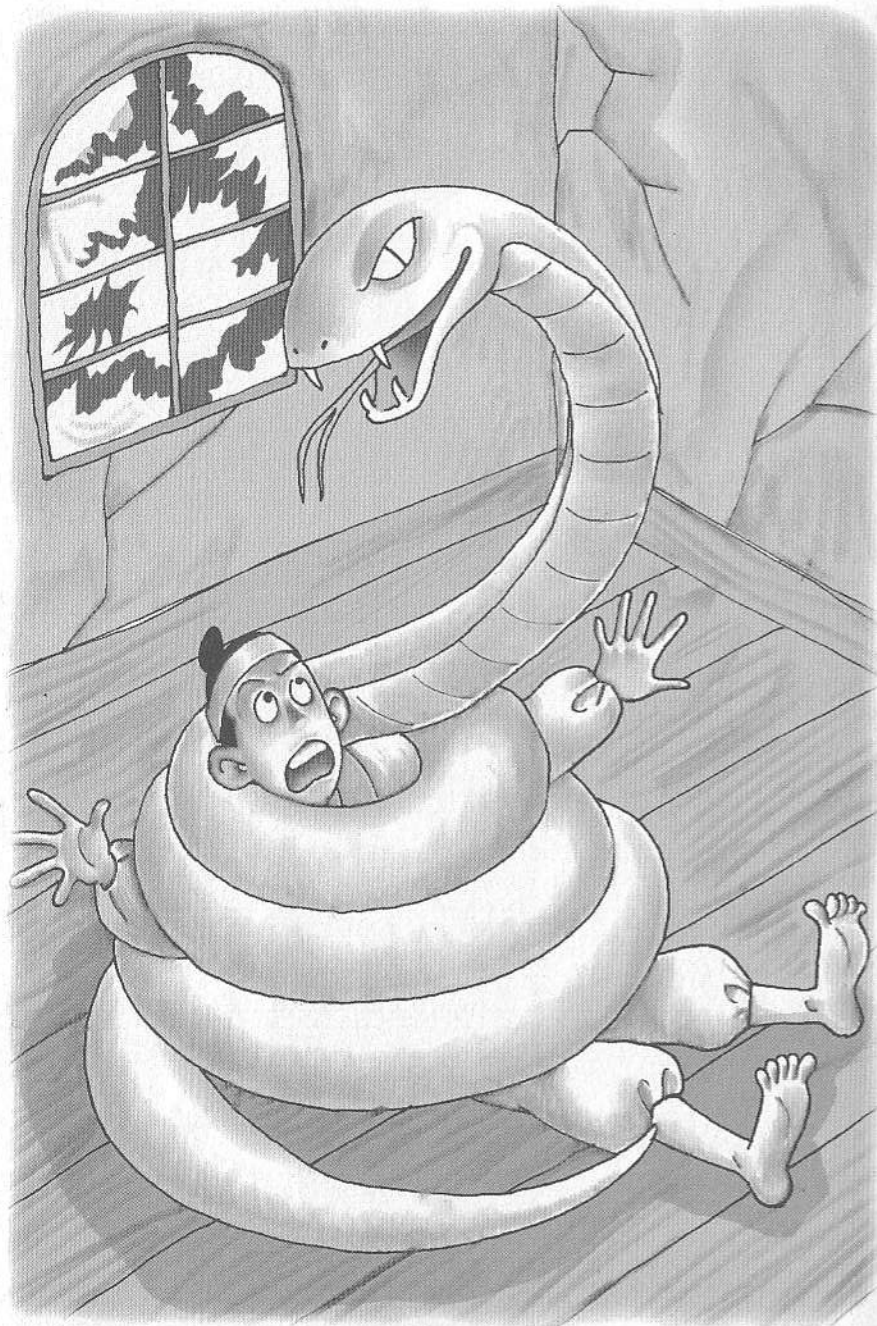
「いいですよ。」

女おんながこころよくうなずいたので、男おとこはほっとして 寺てらの中なかにはいりま
した。

女おんなは、せまいへやに 男おとこをあんないしました。

「では、ここにおとまりください。」

「ありがとうございます。」



女おんながでていくと、男おとこはにもつをおいて へやを見みまわしました。その
とたん、なぜかわからないけれど 水みづをかぶったときのように ぞつと
さむけがしました。でも、男おとこはとてもつかれていたので、すぐにねむり
こんでしまいました。

しばらくして男おとこは、むなぐるしさに 目めをさましました。

「やっ。こ、これは！」

男おとこのからだを、めすの白蛇はくじやが ぐるぐるまきにしています。

「わたしは、昼間ひるま おまえにころされた 大蛇だいじやのつまだ。いまこそ、夫おつと
のうらみを はらしてやる。」

「まってくれ！ おまえが大蛇だいじやのつまなら、うらむのも道理どうりだ。だが、
わたしとて このんでしたことはない。わたしは、これから みやこ

にのぼって 成功せいこうしたいのだ。どうか、のぞみをとげさせてくれ。」
すると、めすの白蛇はくじやが、きつくまきつけていたからだをはなして
いました。

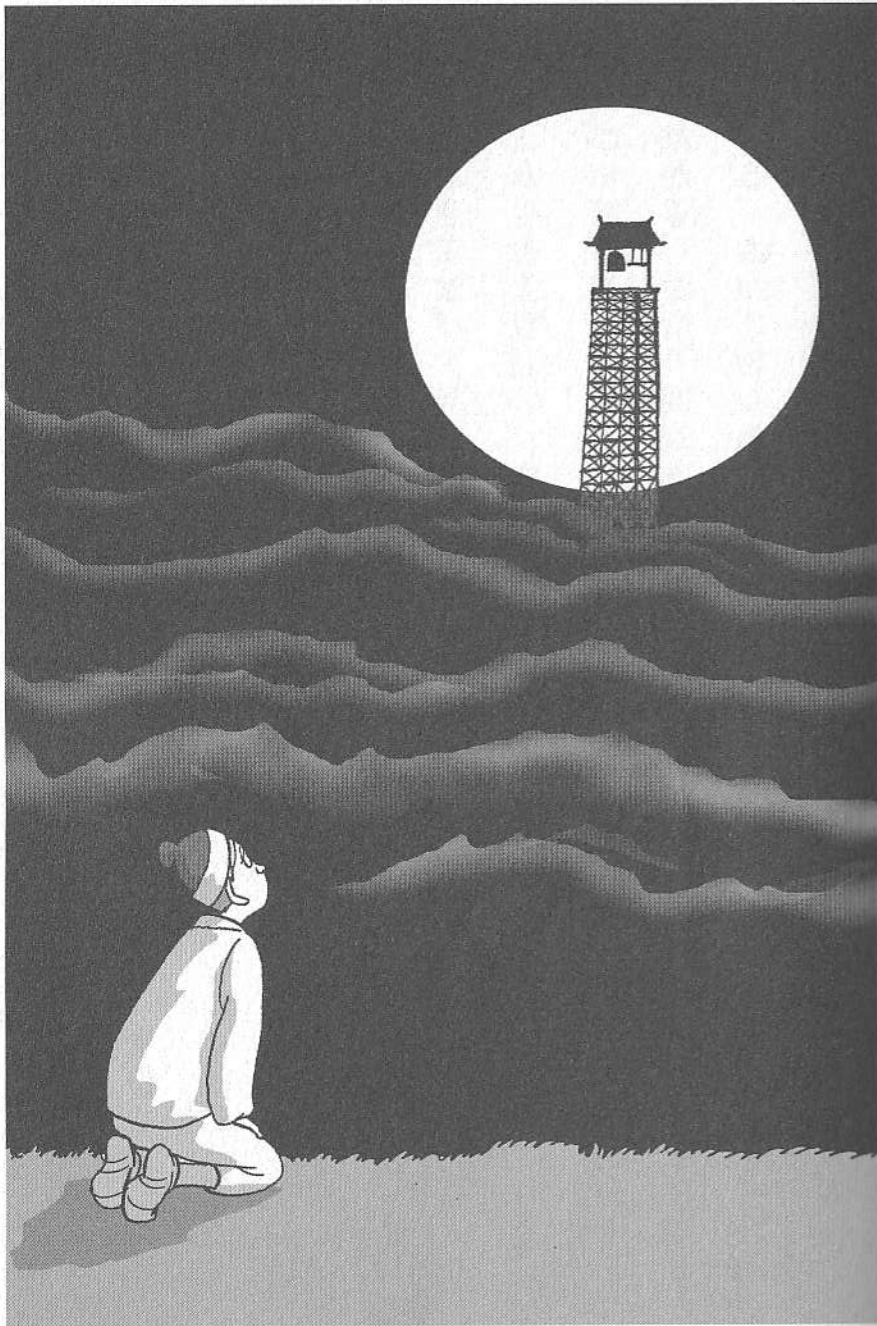
「では、こうしよう。ま夜中よなかの十二時じゅうにじまでに おまえが 寺てらのかねつき
堂どうのかねを 三どさん ならすことができれば、おまえをころすのは やめ
にしよう。ならせなければ、おまえのいのちは わたしのものだ。」
それをきいて、男おとこは へやをとびだしていきました。

「かねつき堂どうは どこだ？」

しかし、外そとにでたとたん、男おとこはがつくりと ひざをつきました。

月つきあかりのもと、この寺てらのかねつき堂どうが 見みえました。

「どうやって、あのかねを ならせというのだ……」



かねつき堂は、目もくらむようなたてものでした。やぐらのてっぺんに つりがねが かかっています。あまりに高すぎて まるで つりがねが 夜空にうかんでいるかのようです。あのかねをつくなど とうてい不可能でした。

男は、じぶんのいのちも もはやこれまでと かくごしました。そのときです。

ごーん、と ひとつ、かねがなりました。

つづいて、またひとつ、ごーん。

それから、かなり間があき、もはや十二時という そのわずかまえに、ごーんと、さいごのかねがなりました。

そのとたん、めすの白蛇は、おそろしいものであったように さつ

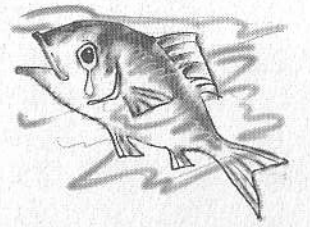
と すがたをけしてしまいました。男はへやにもどり、夜があけるまで ふたたび ねむりにつきましました。

あくる朝、男は、だれもない寺を あとにしました。

かねつき堂にいったみると、高い高いやぐらの つりがねのま下あたりに、かささぎが二わ おちていました。一わは首のほねをおり、もう一わは頭をくだいて死んでいました。

「かねをならしてくれたのは、かささぎだったのか……」

男は、二わのかささぎの恩に、ふかく頭をたれました。



ふしぎな魚さかな へモロッコのおはなし

まずしいりょうしの家いえに、アリという わかものがいました。アリは、弟おとうとたちがヒトデをいじめているのを見て、かわいそうだからと 海うみにはなしてやったりする 心こころやさしいわかものでした。

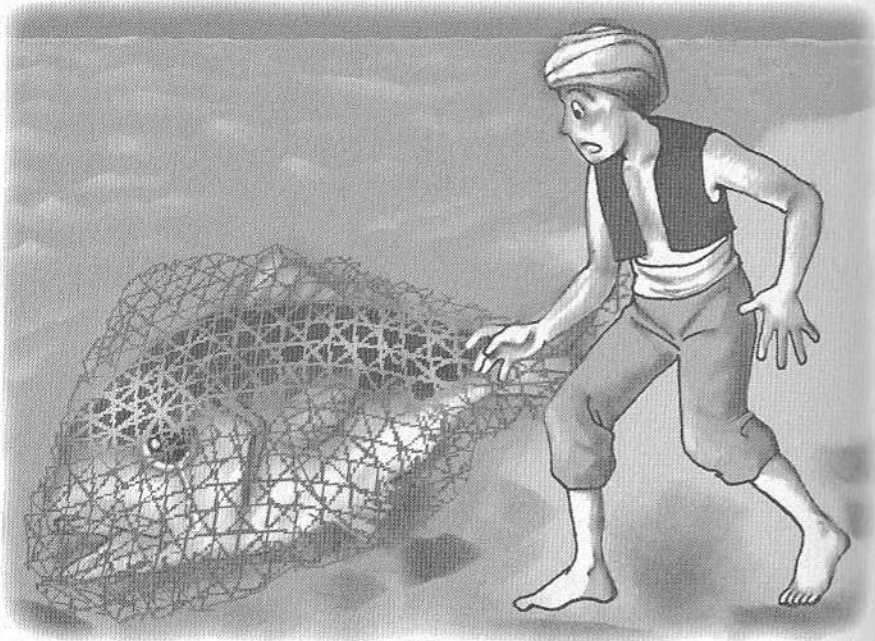
あるとき、アリは父ちちといっしょに海うみへいき、いつものようにりをはじめました。さいしょにあみにかかったのは ろばのほねでした。つづいて、大きな石いしがかかりました。

「アラー（教の神イスラム）のお力ちからぞえが ありますように。」

そういつて、父ちちが三さんどめにあみをなげると、ぐいぐいあみがひっぱられて、なんと、人ひとのせだけほどもある魚さかなが かかりました。

「こんなに大きな魚さかなは はじめてだ。にぐるまをとってくるから 番ばんをしていなさい。」
父ちちはそういつて 家いえにもどつていきました。

アリが 見みはりをしてると、



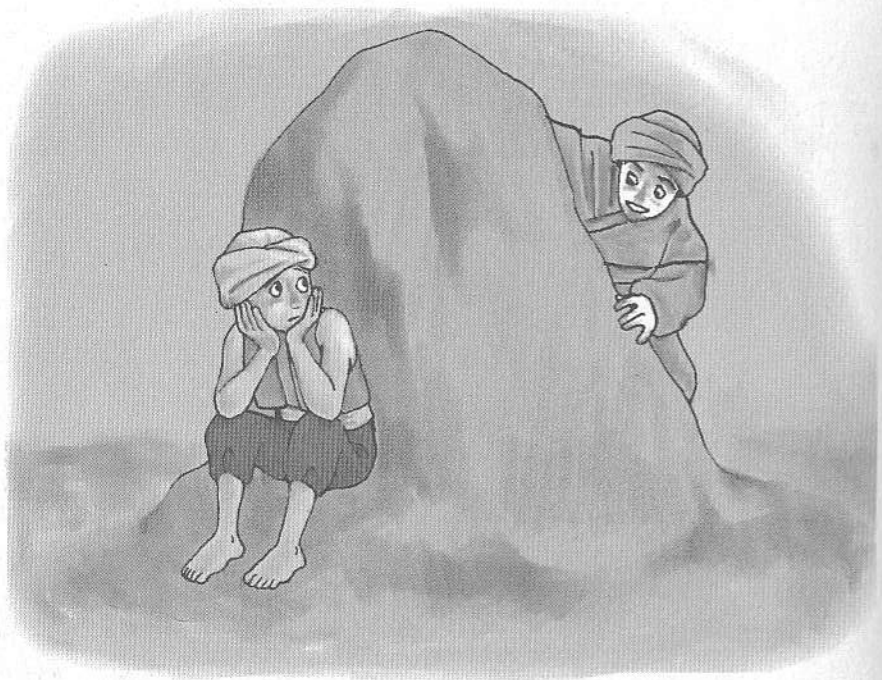
魚さかなのまるい目めから、青あおいなみだが ぼろぼろこぼれおちました。

アリは、おもわず魚さかなをあみからはずして、海うみにはなしてしまいました。
大きな魚さかなは おれいをいうように いちど水面すいめんから顔かおをだし、ふたたび
しずんでいきました。

そこで、アリは はっと われにかえりました。

「ぼくは なんてことをしてしまっただろう。家いえでは たくさんの弟おとうと
や妹いもうとたちが、はらをすかせてまっぴらというのに。とうさんがせっか
くとった あんなに大きな魚さかなを にがしてしまふなんて……」

アリは、家いえのだれにもあわす顔かおがないと おもいました。そして、こ
うなつては、もう、どこかとおくにいくしかない、あてもなく ある
きはじめました。



どこをどう あるいたので
しょうか。気がつく、日ひがく
れかけていました。アリは、海うみ
につきでた岩いわのかげに すわり
ました。すると、

「あなたの心こころが、おだやかであ
りますように。」

そういつて、岩いわのうらから、
ひとりの男おとこが でてきました。

「おだやかでなんか いられな
いよ。家いえのみんなに だまって

わかれをつけてきたところなんだから。」

「ア리가わけをはなすと、男は はずかにうなずきました。

「それでは、わたしといっしょに、みやこにいきましょう。」

「みやこ？ いったい、それはどこにあるんだ？」

「ついていらつしやい。」

男はアリをしたがえて、ぐるりと 岩をひとまわりしました。すると、なみのむこうに、白いきゆうでんや とうや たくさんの家が、見えてきました。ふたりは 岩づたいにすすんでいき、ようやくみやこについたときには すっかりくらくらなくなっていました。

男は、りつばなやどに へやをとりました。きゆうじが、おいしそうなひつじ肉をはこんできて、テーブルの上は、見るまに ごちそうで

いっばいになりました。

「ぼくは、お金をもつてないよ。」

と、アリがいうと、男はにっこりわらって いいました。

「お金なら、わたしがもっていますよ。」

あくる日、アリと男は 市場にでかけました。たべものや宝石、じゅうたんをうる店がならんでいて、たいそうなにぎわいです。

アリは、大きなぬのやのまえで 立ちどまりました。

「なんてきれいなんだ。にじのようなきぬや、あざやかなもようがそめぬかれたもめん。ぼくにも、こんな店がもてたらなあ……」

すると 男は、アリを あき家のたてものにつれていきました。

「では、わたしたちもここで、ぬのやをはじめましょう。」



男が、とおい外国のぬのや、見たこともないぬのを しいれてきて、
ならべたので、店はたちまち 大ひようばんになりました。

ある日のこと、イスラムの王さまスルタンが、店のそばをとおりが
かりました。店のまわりは人がいつぱいで、さきにすすめません。

「このさわぎは、なんじゃ？」

「あの店には、すばらしいぬのがおいてあるのです。それで、みんなが
おしかけているのですよ。」

おとものお話をきいたスルタンは、ひざをうちました。

「そうじゃ！ ひめのたんじょう日に、ぬのおくるとしよう。」

スルタンはアりに、店でいちばんじょうとうなぬのをもって きゆう
でんにくるよう、いいつけました。

あくる日、アリは 花もようのぬのをたずさえて、きゆうでんにいきました。ひめは そのぬのがたいそう気にいり、あすもまた べつのぬのをもってくるよう いいつけました。

つぎの日、アリは、青の地にダイヤモンドをおりこんだぬのを もつていきました。ひめは これもたいそう気にいって、あくる日もまた べつのぬのをもってくるよう いいました。

「あしたのぬので、たんじょうパーティーのドレスをつくるわ。」

ひめは、アリのぬのとおなじくらい、アリのことも 気にいってしまつたのです。

その夜、アリは、ひとり海べにむかいました。

「ああ、ぼくも、ひめのたんじょうパーティーにいきたいなあ……」



アリも、スルタンのひめぎみに、すっかり心をうばわれていました。

そのとき、海の中で声がしました。店にいるはずの男の声に聞こえます。なみのあいだに目をこらすと、なんと、いつかのあの大きな魚でした。

「では、あした こうもうしでなさい。『スルタンさまが おゆるしくださるなら、このぬの

を あなたにプレゼントしたいのですが」と。

あくる日、アリは、金と赤の糸でおられた 朝やけの色のようなぬのを もつていきました。

ひめは、こんどのぬのも たいそう気に入りました。そこで、アリは大きな魚にいわれたとおり おもいきつてもうしでました。

「スルタンさまが おゆるしくださるなら、このぬのを あなたにプレゼントしたいのですが……」

アリの声は ふるえていました。というのも、アリは いままでこそ金もちの商人ですが、そのむかしは、まずしいりょうしのむすこだったのです。そんなアリが、スルタンのひめぎみに プレゼントをおくるなど、おそれおおいことだったからです。

ひめのよこで、スルタンが もつたいぶつていいました。

「では、あしたのパーティーに、おまえをしようたいしよう。」

アリは、大よろこびで きゆうでんをあとにしました。でも、かえる道みち、だんだん元気がなくなってきました。そして、家につくころには ひどくしずんだ顔をしていました。

男が、しんぱいして たずねました。

「いったい なにがあつたんだね？」

アリが、くらい声でこたえました。

「ぼくは ひめのたんじょうパーティーに よばれた。つぎは ひめにけっこんをもうしこみたいが、ぼくは ひくい身分の出だ。とうていかなわぬのぞみなのさ……」



「ああ、人間とは、ひとつのぞみがかねえば さらに上をねがうものなのだね。きみはたしかに 高い身分の出ではない。でも、いまでは こんなに金もちだ。おもいきって スルタンに たのんでごらん。」

「アリはまよいましたが、男はこれまでいちども まちがったことをいいませんでした。」

そこで、つぎの日、アリは心

をきめて きゆうでんにむかいました。

「なに、わしのむすめを よめにもらいたいだと?」

「はい。力いっぱいはたらいて、ひめぎみを かならずしあわせにいたします。」

すると、スルタンのきさきが、手にはめたゆびわを見せながら いいました。

「これは、たいそうねうちのあるしんじゆです。これにまけないしんじゆを プレゼントできるなら、むすめの夫となれるでしょう。」

アリは店にもどって、男にそうだんしました。男はアリに、もういちど海へにいくよう すすめました。

「あの魚に、あえるかもしれないからね。」



その夜、ア리가海へいくと、とつぜん、かみなりがとどろいて、あらしがやってきました。あの魚の音がしますが、すがたは見えません。やがて、あらしはさり、雲のあいだに、星がひかりはじめました。すると、人のちかづいてくる足音がしました。

やってきたのは、あの男でした。いえ、くらくてよく見えないのですが、ききなれた声で、それとわかります。

「あなたは、ぼくの友だちですか？ それとも、大きな魚ですか？」

「わたしはきみの友だちで、大きな魚です。わたしなら、そのしんじゅを見つけることができるでしょう。でも、それは、いのちとひきかえの大しごとになるので、さよならをいいにきました。」

男は、しずかにつづけました。

「いつか きみの弟たちがヒトデをつかまえて ころそうとしたとき、
きみはそれをとめて 海にはなしてくれましたね。わたしは そのヒト
デでした。それから、わたしは大きな魚になり、きみのおとうさんにつ
かまってしまいました。でも、ふたたび きみがたすけてくれました。
二どもいのちをすくつてもらった人を たすけるのは、とうぜんです。
きみがさがしているしんじゅは、海の王のもとにあります。わたしがい
のちをさしだせば、しんじゅはきみのものになるでしょう。わたしには
親も子もないので、なげきかなしむものはいません。」
「そんなことはない！ このぼくが、いるじゃないか。」
「きみは、ひめとけっこんしたいのではないのですか？ わたしは も
う、かくごができています。」

アリの心は、はげしくゆれました。

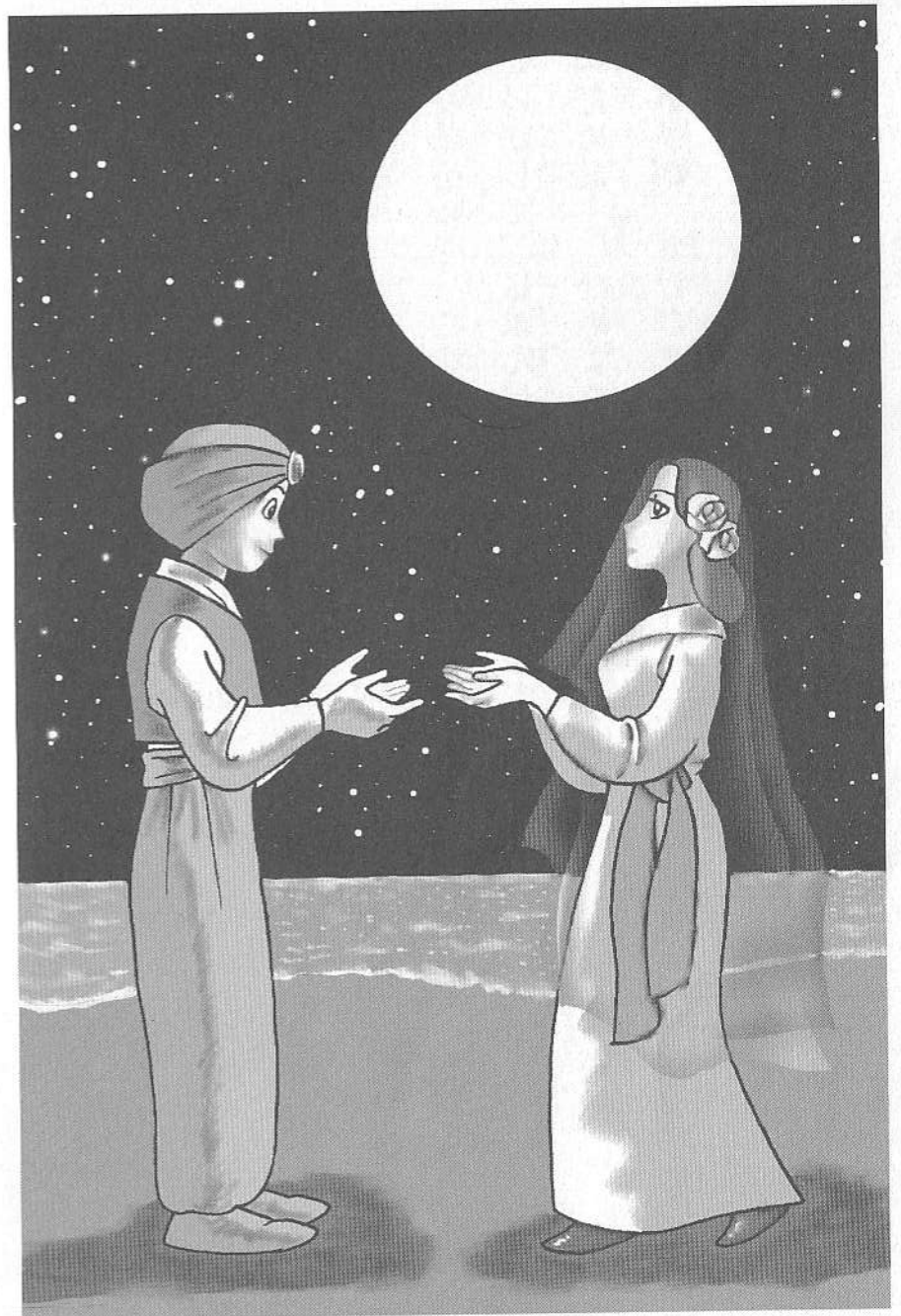
《……ぼくは、ひめに恋している。そして、しんじゅは 手のとどくと
ころにある。これも、アラーのおぼしめしだ。だが、かわりに ぼくは
たいせつなものを うしなうことになるのではないか？

いったい、いのちとひきかえのプレゼントなど、うけとることができ
るだろうか？ この男がいたから いまのぼくがあるのだ。友だちをぎ
せいにして、じぶんがしあわせになっていいものか。》

「だめだ！ ひめより、きみとの友情のほうが とうとい。」

アリが、さけびました。そのとたん、かみなりがなりわたり、あらし
がまいもどってきました。

しばらくして 雨が上がり、月が顔をだすと、男のすがたはなく、ひ



とりのむすめが 立たっていました。

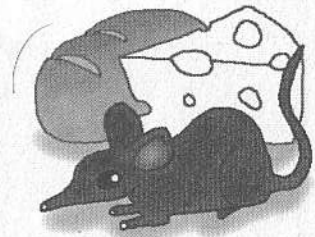
「わたしは、スルタンのひめぎみとおなじ日ひに、まずしいりようしの小屋こに生まれました。父ちちはうでのよいりようでしたが、とくいになりすぎて 海うみへのかんしゃの気きもちを わすれるようになりました。それで、海うみの王おうのいかりをかい、ある日ひ、父ちちは海うみにしずんだのです。

わたしはヒトデにかえられ、だれかが三さんど いのちをたすけてくれなければ、人間にんげんにもどれないことになりました。そして いま、あなたはそれをなしとげてくれたのです。」

月つきの光ひかりの下したに立たつむすめは、だれよりもうつくしく見みえました。アリは、だいじな友ともであり、あいするつまとなるそのむすめを、つよくだきしめました。

ハメルンの^{ふえ}笛ふき

〈ドイツのおはなし〉



ドイツに ハメルンという^{まち}町があります。そのむかし この^{まち}町がたいへんなさいなんに 見^みまわれたことが ありました。すごい数^{かず}のねずみが、ふつてわいたようにあらわれたのです。

通^{とお}りという通^{とお}りを ねずみがか
けめぐり、家^{いえ}じゅうを うろちよ
ろするので、ちよつとあるけば、
ふんづけてしまうほどです。

朝^{あさ} ふくにきがえようとすると、

そで口^{ぐち}から つぎつぎねずみが
とびだしてきます。

パンかごのパンも いれたと
たんに なくなっているという
ありさまでした。

町^{まち}の人^{ひと}びとは、ねずみみたいじ
にむけて あらゆる手^てをつく
しました。となり町^{まち}から ねこ
をかりてきたり、どくだんごを
おいたり、教^{きょう}会^{かい}にあつまって
いのつたり……。





でも、ねずみの数は ふうるばかりで、まるで ききめはありませんでした。

そんなある日、見しらぬ男が町にやってきました。

その男は とてもせがが高く、まがった鼻に 口ひげをたくわえ、宝石のような青い目をしていました。みどり色のジャケットに 赤いズボン、鳥のはねのついた大きなぼうしをかぶり、足

には あみあげぐつをはいています。

男は、町の広場で立ちどまると、ひくい声で うたいはじめました。

♪ たえなる笛のしらべの

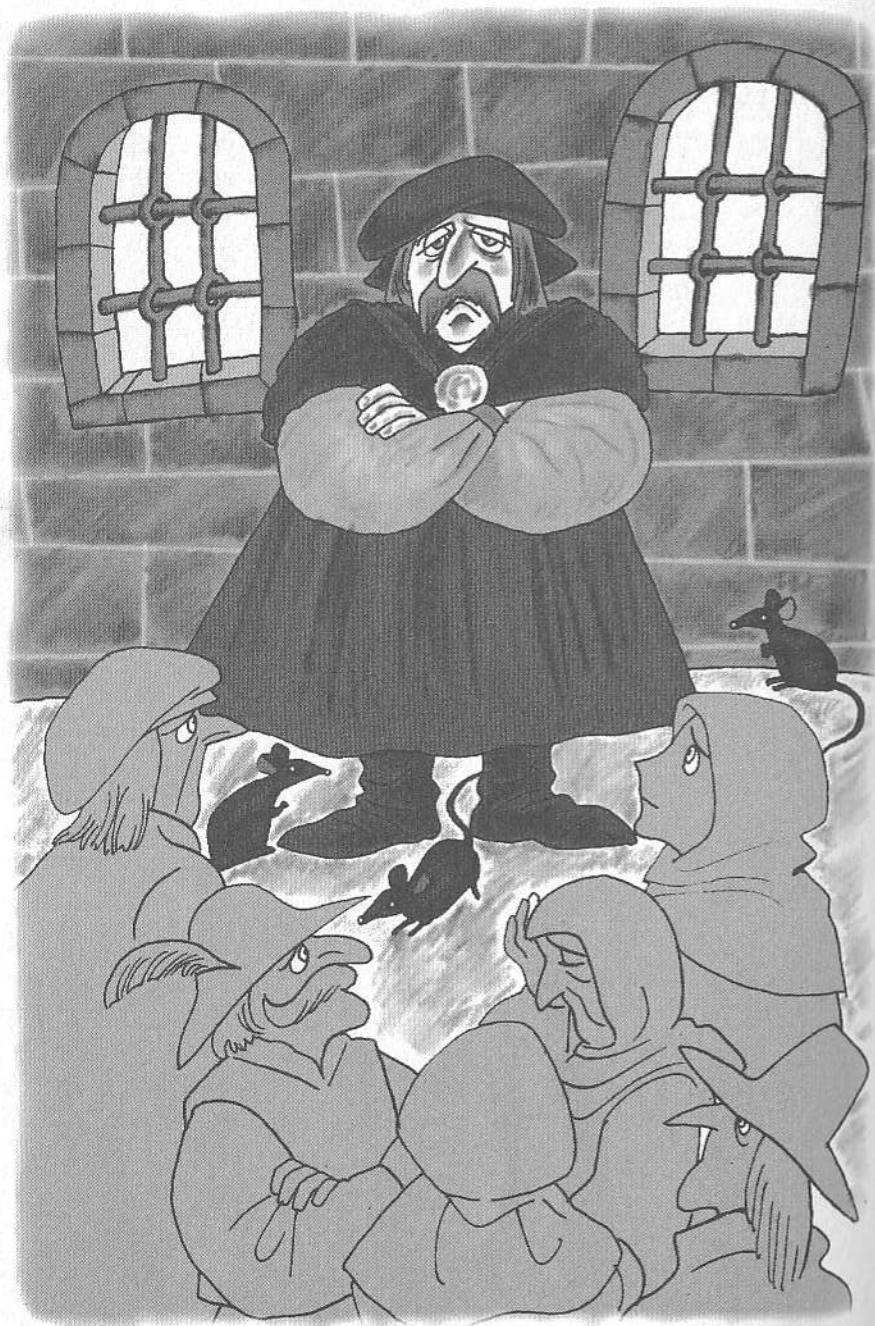
ふしぎなるわざ

わざわいのもとは

たちまち 水の下に♪

「それは、わが町のさいなんについて、うたっているのかね？」

ねずみたいじのそうだんであつまっていた 町の人びとが、声をかけました。



「いかにも。ねずみ」ぴきにつき「グロス（ドイツのお金の単位。グ）。やくそくをおまもりくださるなら、あつというまにのこらずたいじしてみせましょう。」

「ねずみ」ぴきにつき「グロスだって！」

「あれだけの数だ。とてつもない大金になるぞ。」

「さいなんにつけこんで金をまきあげようと。いうんじゃないだろうね？」

みんなが、ひそひそいいいきました。人びとはねずみのことですから心がすさんでしまい、わるいふうにししかかんがえられなくなっていたのです。

すると、この町の市長が　いいました。

「まずはやらせてみて、そんなはあるまい。金をはらうかどうかはそのあとの話だ。」

それをきいて、町の人びとが、いいました。

「市長にまかせよう。」

「そうしよう、そうしよう。」

そこで、市長が、男にたのみました。

「それでは、ねずみみたいじを、おねがいしよう。」

男が、ねんをおしました。

「ねずみ一ぴきにつき一グロス。よろしいですか？」

「わかった。」

市長は、おちつかない目で、こたえました。

「では、こんやをおたのしみに。」

男はいうと、ひくい声でうたいながら、さっつていきました。

♪ たえなる笛のしらべの

ふしぎなるわざ

まどよりごらんあれ

銀貨にまさるしあわせ

月ののぼるころ、男はふたたび広場にあらわれました。そして、手にした笛を、しずかにふきはじめました。

——トウラ〜リ ティラリト テイト〜ラ トウルラリ。



ふしぎな笛の音が、夜の町にながれます。すると、ひたひたと なみのような音をたてて、ねずみたちが あつまりはじめました。

ねずみは、地下室から、やねうらべやから、だいどころのすみや かくのすきまから、外にでてきます。夜の通りは、ねずみでいっぱいになり、ねずみの川となって、広場にながれていきました。やがて、広場に ついたときには ねずみのこう水のようになりました。

と、広場じゅうのねずみが いっせいに うごきだしました。広場の まん中にいた男が、笛をふきながら あるきだしたからです。

男は、笛をふきふき 通りをぬけて 町はずれにむかいました。

——トウラ〜リ テイラリト テイト〜ラ トウルラリ。

笛の音にひかれ、男のうしろから あふれんばかりのねずみが つづ

きます。やがて、町はずれの川までくると、男は 足をとめました。
川は 水りようがおおく、中ほどは あわだったり うずをまいたり
していました。

男は そのうずをさして、よくとおるひくい声で いいました。

「とびこめ！ とびこめ！」

先頭のねずみが、川のへりからバシヤツととびこみ、うずのにまれて
見えなくなりました。二ばんめのねずみも つづいてとびこみ、おなじ
ように 見えなくなりました。

こうして、ねずみのたいぐんは、なみのように つぎつぎ川にとびこ
んでは、うずのにまれて 水の下にきえていきました。

さいごに、とてつもなく大きな白ねずみが、からだをひきずりながら



川べりにたどりつきました。そ
れは、年おいた ねずみの王で
した。

笛ふきが、ねずみの王にたず
ねました。

「みんな、あそこにいったか？」

「みんな、あそこにいる。」

「ぜんぶで、なんびきだ？」

「わたしをいれて九百の九千
ばいと、九百の九十ばい、そ

れに、九十九ひきだ。」

「では、おまえもいくがいい！」

笛ふきがどなると、白ねずみは 川にとびこみ うずのまれてきえ
ました。

そして、あれほどいたねずみは、一ぴきのこらず いなくなりました。
あくる朝、男は三たび 広場にあらわれました。

「ねずみはいなくなつた。ぜんぶで、九百の九千ばいと、九百の九
十ばい、それに、九十九ひきだ。やくそくどおり、一ぴきにつき
グロスをいただごう。」

すると、市長がいいました。

「では、ねずみの数を たしかめよう。ねずみはどこかね？」
もちろん、ねずみは、もう、一ぴきもいません。なぜって、きのう

男が笛をふいて 川にとびこま

せてしまったのですから。男の
顔が、さつと赤くなりました。

「しつてのとおり、水の中だ。」

「ふん。かぞえられないねずみ
に、金はだせんな。しかし、き
みは、たしかに この町の役に
たったのだから、おれいをしよ
う。」

そういつて、市長は五十ペニ

ヒ（二グロスのお金の単位。）をさしだしまし



た。それは、とんでもなく少ないお金でした。男はいかりをおさえ、予言者のようにいいました。

「おとながはたさなかつたやくそくは、子どもたちが はたすだろう。」
そして、男は 風のようにさつていきました。

町の人びとは、お金をはらわずにすんだと 大よろこびでした。市長も、じぶんの頭のよさに ほれほれしていました。

あくる日曜日、人びとは、町のはずれの教会にいき、家にのこつているのは 子どもばかりでした。

そこに、どこからともなく、あの笛の音が きこえてきました。

——トウラ〜リ ティラリト テイト〜ラ トウルラリ。

すると、家にいた男の子も女の子も、大きい子もよちよち歩きの子も、

われさきにと通りにとびだし、広場にむかつて かけだしました。

広場では、せが高く まがった鼻に 口ひげ、宝石のような青い目を

したあの男が、しずかに笛をふいていました。

やがて、町じゅうの子どもがそろくと、男は、笛をふきながら ゆつくり あるきだしました。子どもたちは、笛の音にひかれて 男のあと

につづきました。

子どもたちのぎょうれつは、町はずれにつき、山にはいりました。そして、けわしくなる山道を、さらにすすんでいきました。

男が、笛をふきながら 岩かべにいきあたると、岩が しずかにわれしました。男は、なおも笛をふきながら、岩のあいだにはいつていきました。子どもたちが ひかれるように あとにつづきます。そして、さい

この子が 岩のあいだにきえると、岩は すっとしまりました。
三人の子が 岩のこちらに のこされました。ひとりには、足がわるく
ておくれ、ひとりには、家をとびだしたとき、くつのかたほうをなくして
足をいたため、三人めは、岩のあいだをぬけるとき、ほかの子とぶつかっ
てたおれて、そのあいだに 岩がとじてしまったのでした。
三人の子が なきながら町にかえりつくと、教会からもどった人び
とが、ひっしで 子どもたちをさがしていました。人びとは、話をきい
て あわてて山にむかいましたが、子どもたちがきえた岩のかべは わ
れめもなく、ねずみ一ぴき とおるすきまはありませんでした。
こうして、ハメルンの町の人びとは かわいい子どもたちをうしない
ました。市長は、三人の男の子と ふたりの女の子をなくしたうえに、





「その村の人びとこそ、そのむかし、ハメルンの町からきえてしまった子どもたちの子孫ではないかな？」

ハメルンの町の人びとは、商人の話にじっと耳をかたむけました。そして、とおいむかしのはふしぎなできごとにおもいはせ、「きつと、そうにちがいない」と、ふかくうなずきあったということでした。

いちどは市長をほめそやした町の人びとにも さんさんののしられませんでした。

そののちも、町の人びとは ほうほうにでかけては、子どもたちをさがしましたが、なんの手がかりもありませんでした。

それからながい年月がたち、そのときの親たちもなくなり、親のきょうだいやいとこたちも、のこらず この世をさりました。

そして、また、さらにながい年月がたちました。

あるとき、ブレイメンの商人が、ハメルンの町にやってきて ふしぎな話をしました。

なんでも、ハンガリー語をはなす人びとがすんでいるとおい山あいに、ドイツ語しかはなさない村があるというのです。



おしゃべりなおかみさん

〈ロシアのおはなし〉

むかし、あるところに、おひやくしよのふうふが すんでいました。そのおかみさんときたら、人がよすぎるのか、ばかなのか、これっぽっちも話をはらにためておけないたちで、いいことわるいこと、ぜんぶしゃべってしまいます。それで、だんなさんは、ずいぶんこまった目にあっていました。

ある日のこと、だんなさんが森にいつて、おおかみのあなを ほりかえしていると、シャベルのさきが カチリと なにかにあたりました。

「あいや、なんだろう？」

だんなさんが さらにほりすすむと、土の中から りっぱなかめがあらわれました。ふたをあけると、金貨がぎっしりつまっています。

だんなさんは こしをぬかすほどおどろき、つづいて、こしがうくほどうれしくなりました。でも、おかみさんの顔をおもいだしたとたん、頭をかかえて すわりこんでしまいました。

「かみさんにいったら、すぐにまた しゃべりまわるだろう。地主のだんなの耳にはいったら、金貨は とりあげられちまうにきまつてる。」

だんなさんは かんがえにかんがえて、いいことをおもいつきました。まずは、金貨のはいつたかめを もとのばしよにうめなおし、ちかくの木に しるしをつけました。そして、家にもどっていきました。



とちゆう、川^{かわ}までくると、朝^{あさ}しかけておいたあみに、か^かますが^かか^かつて
ぴんぴんはねています。だんなさんは、か^かますをあ^あみからあ^あげて、
さらにあるいていきました。そして、きのうしかけた わ^わなのところ^{ところ}に
くると、わ^わなにか^かか^かつたう^うさぎが、も^もそもそ^そしていま^{いま}した。

だんなさんは う^うさぎをわ^わなからは^はずし、か^かわりに か^かますをつ^つつこ
みました。そして、ふ^ふたたび川^{かわ}のほ^ほとりにひ^ひきか^かえし、か^かますのあ^あみに
う^うさぎをい^いれました。そして、家^{いえ}にもど^どつてい^いきました。

家^{いえ}につくと、お^おか^かみ^みさん^{さん}に こ^こう い^いいつ^つけ^ました。

「おい、お^おま^まえ。だ^だん^んろ^ろを^をたい^{たい}て、ホ^ホツ^ツト^トケ^ケー^キを^をや^やいと^とく^くれ。」

「なんでだ^だね？ お^おま^まえ^えさん。一^{いち}日^{にち}は^はお^おわ^わつ^つた^たん^んだ^だよ。だ^だん^んろ^ろの^の火^ひは、
お^おと^とす^すの^のさ。それ^{それ}に、ホ^ホツ^ツト^トケ^ケー^キを^をや^やく^くの^のは、あ^あす^すの^の朝^{あさ}だ^だよ。」



「つべこべいわずに、いわれたとおりにするんだ。なぜって、きょうは、森で、すごいものを見つけたから。金貨がぎっしりつまったかめさね。こんばん、それを ふたりして家にはこぶんだ。」

「ひえーっ！ ほんとかね？ おまえさん。」

おかみさんは とびあがってよろこび、さっそく だんろの火をおこして、ホットケーキを焼きはじめました。

だんなさんは、ホットケーキを一まいたべては 三まいをふくろの中につっこみ、また一まいたべては 三まいをふくろにつっこみました。

そうとはしらないおかみさんが、目をまるくしていいました。

「まあ、おまえさん！ また、きょうは やけにたくさんたべるね。これじゃ、いくらやいても まにあわないよ。」

「道はとおいんだ。おまけに、かめには金貨がぎっしりで、とんでもなくおもいから、しっかり はらごしらえをしておかないとな。」

ホットケーキが ふくろいっぱいいたまると、だんなさんがいいました。

「よし。はらはいつぱいになった。おまえがたべたら、でかけよう！」



そこで、おかみさんも ホットケーキをむりやりほおぼり、ふくをき
こんで 外にでました。

ふたりは、ま夜中の森を すすんでいきました。だんなさんは さき
の道をいき、ちようどいいえだぶりの木に、ふくろの中のホットケーキ
を 一まいずつ つきさしていきました。

おいついたおかみさんが、すつとんきような声をあげました。

「ちよいと、おまえさん！ 木に ホットケーキがなってるよ。」

「ありや、ほんとだ。だが、おどろくこたねえ。さつき、わしらの上を
ホットケーキの雲がながれていったのを、見なかったかね？」

「いんや。木の根につまずいちやこまるとおもって、下ばかり見てたか
らね。」

「きつと、その雲が木の上をとおりすぎるとき、えだにホットケーキがひっかかったのさ。それはそうと、このちかくに、わしのしかけたうさぎのわながあったな。ついでに、ちよつくら見ていこう。」

そこで ふたりは、うさぎのわなを 見にいきました。

「おやまあ、あんた！ うさぎのわなに、かますがかかっているよ。こりや、また、どうしたことだろうね？」

「なにいつてるんだ、おまえ。りくかますを、しらないのかい？」

「へーえ！ あたしや、この年になるまで しらなかつたよ。」

ふうふは さらに夜道をすすんで、川までやってきました。

「へい、川だ。やっと 川にきた。まい朝やってくる 川にきた。」

だんなさんが、川、川と しつこくいいますと、おかみさんが、やっ

と気づいて いました。

「そうだ！ おまえさん。川に あみをしかけてたんじやないかね？」

「おう、そうとも！」

だんなさんは 大よろこびであいづちをうち、ふたりで力をあわせて あみをあげると、なんと、うさぎがかかっていた。

「みようだね、おまえさん！ 川のあみに うさぎがかかっているなんて。」

「ばかだなあ、おまえ。川うさぎを 見たことがないのか？」

「へーえ！ あたしや、この年になるまで しらなかつたよ。」

ふたりは、ようやく、だんなさんがしるしをつけた木のところまで きました。そして、こうたいで地面をほり、でてきたかめを おしたり ひいたり かついだり ころがしたりして、家にはこんでいきました。



とちゅう、地主さまの家のまえにきたとき、かこいでねむっているひつじのしりに、だんなさんが こっそり 木の實をぶつけました。ひつじはびっくりして、

「……メエエエ！」

と、なきました。

「いまの声は なんだろうね、おまえさん？」

「地主のだんなが、悪魔にとちめられて わめいてるんだ。いそげ！」
そこで、ふうふは、いっそう手ばやく、かめを おしたり ひいたり かついだり ころがしたりして、家にかけてこみました。そして、いそいで家の戸をしめ、ふたりして、ながいこと 戸のうらで はあはあいつていました。



「なんでまた、夜中になんか、
でかけたのさ？」
「うちのだんなが、森で、金貨
のかめを見つけたもんでね。」
そして、たちまち ぜんぶを
べらべらしゃべってしまいました
た。話は、その日のうちに 村
じゅうにつたわり、夕方には地
主の耳にとどいて、夜には地主
の家のつかいが、家の戸を ド
ンドンたたきました。

だんなさんは、家のどこかに かめをかくすと、おかみさんにいいま
した。

「いいかい、金貨の話は、だれにもするんでないぞ。」

「わかってるよ、おまえさん。」

そして、ふうふは ようやく ねむりにつきました。

あくる日、いつもよりおそく おきたおかみさんは、いつもよりおそ
く だんろをたきつけ、いつもよりおそく 水くみにでました。すると、
となりのおかみさんが まちかまえていて、たずねました。

「あんたところは、けさはなんでまた、いつもよりおそく だんろをた
いたのさ？」

「それが、きのうは夜中にでかけたんで、ねぼうしちまってね。」

「おい。おまえたちは、森で見つけた金貨のかめの話を、なんで
さまにだまつてるんだ？」

「いったい、なんの話でさね？」

だんなさんが こたえました。

「しらばくれるんじゃない。きのうの夜、森から金貨のつまったかめを
はこんだと、おまえのかみさんが しゃべりまわったそうじゃないか。」

「あいつか！ あいつは心根はいいが、すこしどうかしてるからなあ。
ときどき、とんでもないことをいいますのさ。」

「なら、本人にきいてみよう。かみさんをよべ。」

そこで、だんなさんが、家のおくにむけて となりました。

「おい、おまえ！ 地主さまのおつかいが、おまえと話がしたいとよ。」

おかみさんが、びつくりしたような目をしぼしぼさせて、あらわれま
した。

「おまえとだんなは、きのうの夜中、金貨をはこんだんだな？」

「はい、そのとおりでございます。」

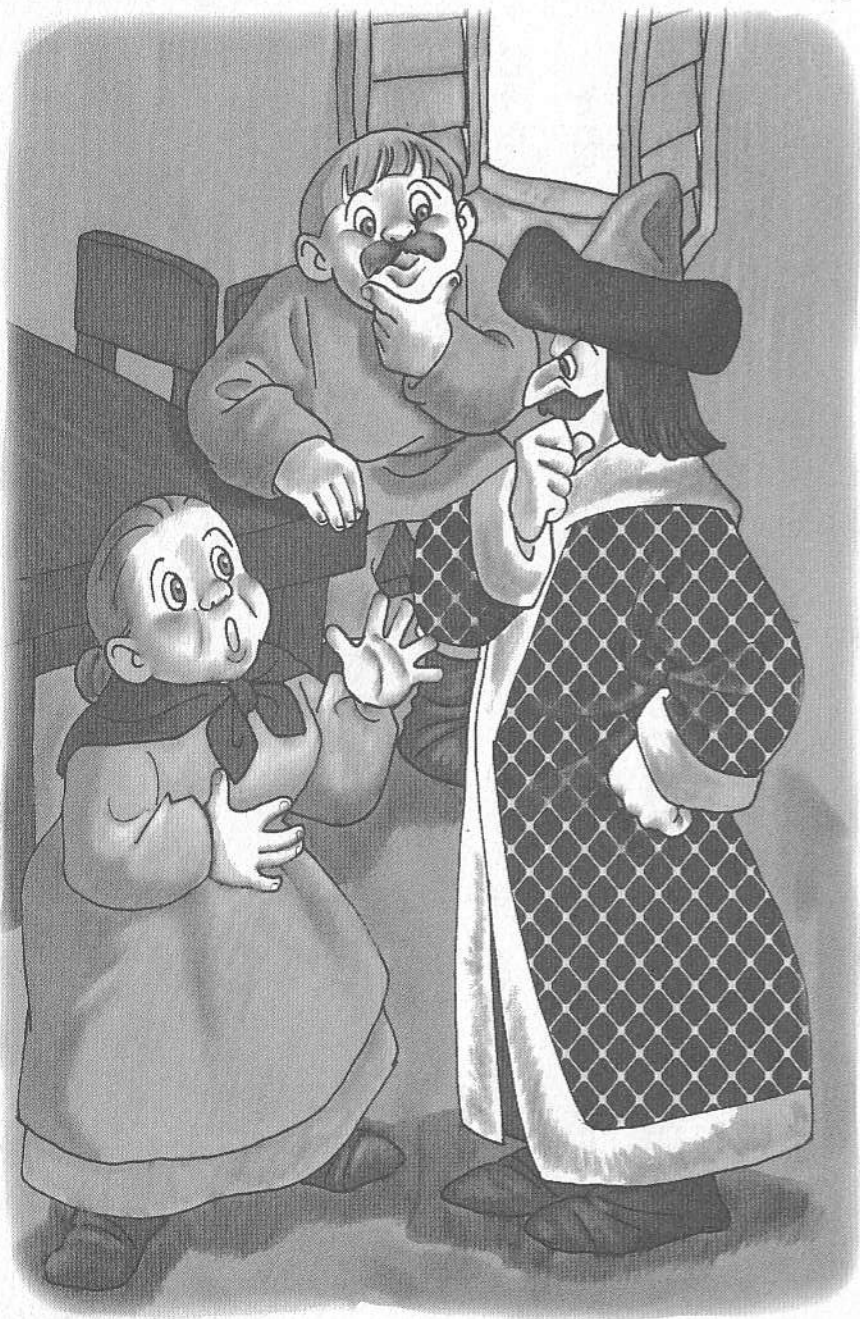
「そのときのことを、すつかりはなしてみろ。」

そこで、おかみさんが はなしました。

「わたしうちの人、夜中に 森をあるいていくと、まずは ホット
ケーキが 木になってましたんで……」

「なんだって？ どういうことだ、それは？」

「なに、そのちよつとまえに、ホットケーキの雲がとおりすぎたんで、
そのきれっぱしが、木のえだに ひっかかっただけのことですがね。」



「なにをいってるんだ、この女は？」おんな

「それから うさぎのわなをのぞいたら、うれしいことに、りくかますがかかってましてね。そして、川かわにでたんで あみをのぞいたら、こんどは 川かわうさぎがかかってましたんです、はい。」

「でたらめも、いいかげんにしろ。」

「でたらめなんて、とんでもない！ そのあと、うちの人ひとと 金貨きんかのかめをほりだして、おしたり ひいたり ころがしたり、家のちかくまでもどってきたところが、なんと、はあ、地主じぬしさんが 悪魔あくまにとつちめられて ひめいをあげたもんだから、もう、おっかなくておっかなくて 家いえにとびこんで、戸とのうらで ふたりでながいこと はあはあいつとりましたですよ。」



むかし ペルシアに 石の町いしまちがありました。すべてが 石いしでできている町まちです。家いえや道みちばかりかそこそこにすむ 人ひとびとまでも。というのも、ちかくの山やまのほらあなあなに 人ひとくくいおおににががいて、町まちにおおりりててききては 子こどもどもををささららつつてたたべべてていいるるののです。人ひとびびととは そのそのたたびびに おおいいかかけけままししたたが、ももどどつつててききたたももののはあありりまませせん。おおににのの目めかかららででたた光ひかり

地主じぬしのつかいは、とうとう おこりだしました。

「ばかも、やすみやすみいえ！ こんなやつは、あいてにならない。」

「どうか、はらをたてねえでください。根ねはいいやつなんでして。いつてることは、このとおり、まるでしんじられねえけども……」

地主じぬしのつかいが やしきにもどつてつたえると、地主じぬしがいました。

「つまりは、かみさんのたわごとに、村むらじゅうがのせられたというわけじゃな。つくづく ばかなふたりだ。」

そのご、その話はなしは だれの口くちにも のぼらなくなりました。

だんなさんは かめの金貨きんかをじょうずにつかい、ふうふは たのしくくらししました。もし死しんでいなければ、いままげんき元げんき気でいるはずです。



が、人びとを 石にかえてしまうからです。そんなわけで、山のあちこちに 人のかたちの石ぞうが によきによき つつ立っていました。なん年かがすぎ、石の町の人の数は とてもすくなくなりました。そこで、人びとは、おにたいじにむかうよう 町の長官にうったえました。が、長官は石になりたくないのです、じっとしていました。

そんなある日、長官のひとりむすこが おににさらわれました。長官も じぶんの子どもはだいじだったので、兵をひきいて 山にはいりましたが、たちまち石にかえられてしまいました。

人びとが、とほうにくれて しずまりかえっていると、チャダングという まずしい家の少年が、名のりをあげました。

「こうやって、死の町になるのをまっけていても しかたない。ぼくが、

おにたいじにいつてくる。」

チャダングは、しおと はりとおにの油あぶらをよういしてもらい、おにのところに、わざと町まちはずれをぶらつきました。すると、たちまち おにがあらわれました。チャダングは とてもこわかったのですが、そんなようすはおくびにもださずに いいました。

「きょうこそ、ぼくの番ばんだとおもって、かくごしてまっていたんだ。」

「ぐわつははは！ そいつは、おもいきりがいい。」

おには、チャダングをひよいかかえ、のっしのっしと 大おおまたであるいて、ほらあなにもどつてきました。そして、火ひのはいった石いしのかまどのまえに チャダングを ぼんとおきました。チャダングは ますますこわくなりましたが、へいきをよそおって いいました。

「ぼくは、ほかの子こより大おおきいから、ほねもかたいよ。うまくかみくだけないといけないから、歯はをといであげるよ。」

おには、チャダングの がっしりしたからだを見て、なるほどと うなずきました。

「ふむ。ひとつ、そうしてもらおうか。」

そこで、おにが あーんと口くちをあけると、チャダングは、おにの口くちにもつてきたはりを なげこみました。

「うっ、いたいぞ！」

「なに、じぶんの歯はだから、すぐになれるよ。水みずでもものんだら？」

いわれたとおり、おにが ごくんと水みずをのんだから、たまりません。

はりが、はらに ちくちくささりました。そこをすかさず、目めにむけて

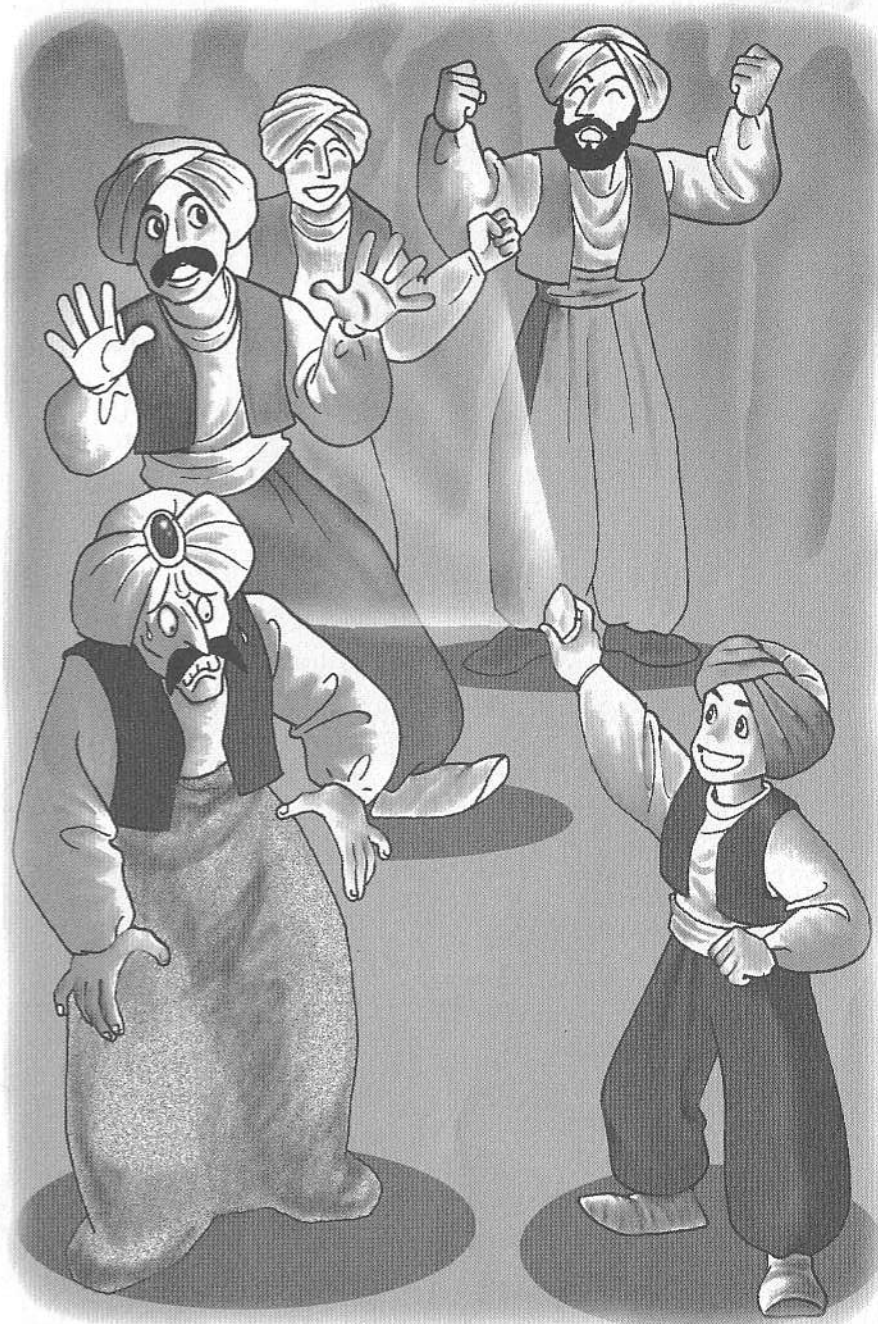


しおをなげつけました。

「うっ、なにも見えん！」

おにがひるんだすきに、つぎは油あぶらをふりかけました。おには、ひつ
しで目をあけ、ふしぎな光ひかりでチャダングを石いしにかえようと思いました
が、目めから光ひかりがこぼれたとたん、ポツとからだに火ひがついて、やけ死し
でしまいました。

チャダングは、みごとにおにたいじをして山やまをおりました。とちゆ
う きらりとひかるものがあつたので ひろいあげると 大きなダイヤ
モンドでした。日ひにすかすと、ダイヤモンドの光ひかりが そばの石せきぞうにあ
たりました。すると、光ひかりのあつたところから 石せきぞうは 人間にんげんにも
どって うごきはじめました。



「やあ、生きかえったぞ！」

チャダングは、頭あたまから足あしへと光ひかりをあてては、石せきぞうをつぎつぎ人間にんげんにもどしていきました。さいごは、長官ちやうかんの石せきぞうでしたが、人ひとびとをたすけなかつたばつとして、上半身じやうはんしんしかもどしてやりませんでした。人間にんげんにもどつたみんなは、わっしょいわっしょいとチャダングをかっいで、町まちにもどりました。そして、牛うしとひつじをそなえて、くるしみがさつたことをよろこびあいました。

チャダングは、気きだてのよいむすめとけっこんし、あたらしい長官ちやうかんになりました。平和へいわな町まちには、子こどもたちが元氣げんきにそだって、人ひとびとはいつまでもしあわせにくらしました。



ねこの大王だいおう

ヘイギリスのおはなし

ある冬ふゆの夜よるのことです。はかの番人ばんにんのおかみさんが、大きな黒ねこのトム公こうといっしょに、ろばたでこっくりこっくりいねむりをしながら、夫おつとのかえりをまっています。すると、

「おい、おまえ！ トム・テイルドラムなあ、だれのこつた？」

そういって、夫おつとがとびこんできました。おかみさんもねこも、いつきに目めがさめました。

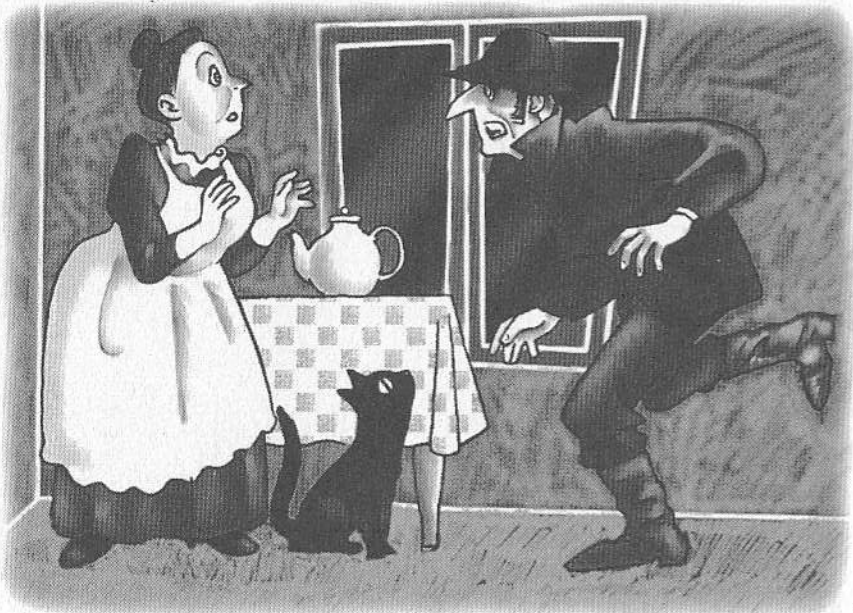
「まあ、あんた。なんでまた、そんなことをきくんだね？」

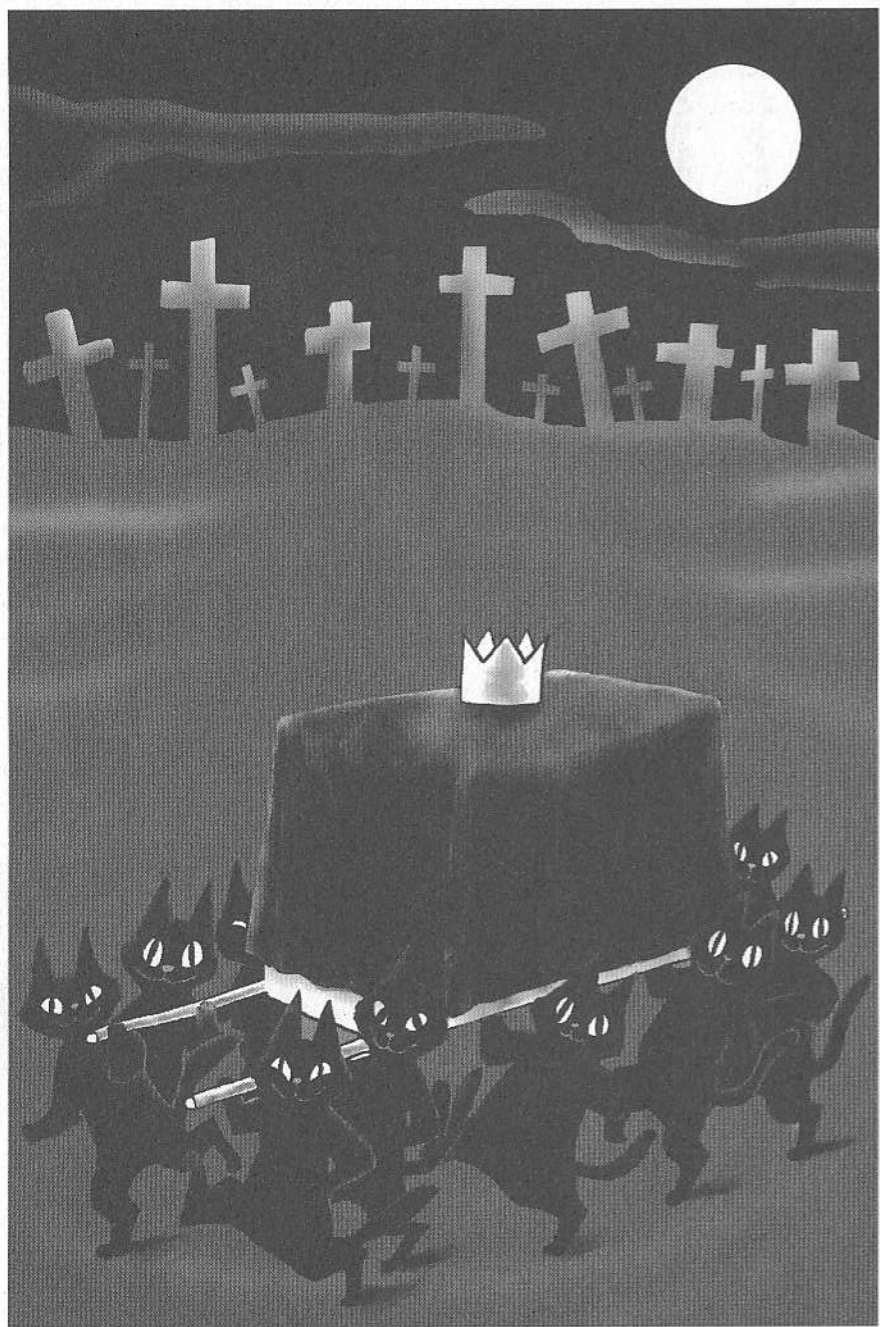
「それがこうさ。フォーダイスのだんなのはかをほってたら、うっかりいねむりしたらしくてな。《ニャーオ》となくねこの声こゑで、目めがさめた。」

「ニャーオ！」

トム公こうがこたえてなきました。

「そう、そんなふうにな。そこで、おれが、声こゑのするほうを見たら、なにがやってきたとおもう？」





「さあね。けんとうもつかないわ。」

「なんと、トム公こうみてえな 黒ねくろこが丸きゅうひき。小ちいさなかんおけを はこ
んできたのさ。かんおけには、黒いビロードのおおいがかかってな。
その上うえには、金色きんいろのかんむりがひとつ。でもって、三歩さんぽごとに 丸きゅうひき
がそろって《ニャーオ》。」

「ニャーオ！」

トム公こうが また、こたえてなきました。

「そう、そのとおり。ちかづくにつれて、ねこたちの目が、みどりのあ
かりみたいに ペかペかひかって——やれ、トム公こうを見みなよ！ まるで、
おれの話はなしが わかってるみたいじゃないか。」

「いいから つづけておくれよ。トム公こうなんか、ほっといてさ。」

「ああ。で、かんおけをかついだ 九ひきのねこが、おれのほうに ずんずんちかづいてきては、三歩めごとに《ニャーオ》。」

「ニャーオ！」

トム公が、またなきました。

「そうそう。でもって、九ひきのねこは、フォーダイスのだんなのはかまでくると、ピタリととまって、このおれを じーつと見た。ちようど、いまのトム公みてえにな。」

「トム公のことはいいから、それで、どうしたんだね？」

「どこまではなしたっけ？——うんにゃ。九ひきは、つつ立ったまま、おれをじーつと見た。と、一ぴきがすすみでて、きいきい声でいったんだ。『だんな！ トム・テイルドラムに、タイム・トルドラムが死んだ』

と つたえとくれ。』それで、おれは、おまえにきいたってわけさ。『トム・テイルドラムたあ、だれのこったね？』って。なぜって、だれがトム・テイルドラムかわからねえじゃ、タイム・トルドラムが死んだって、トム・テイルドラムに つたえようがないじゃないか？」

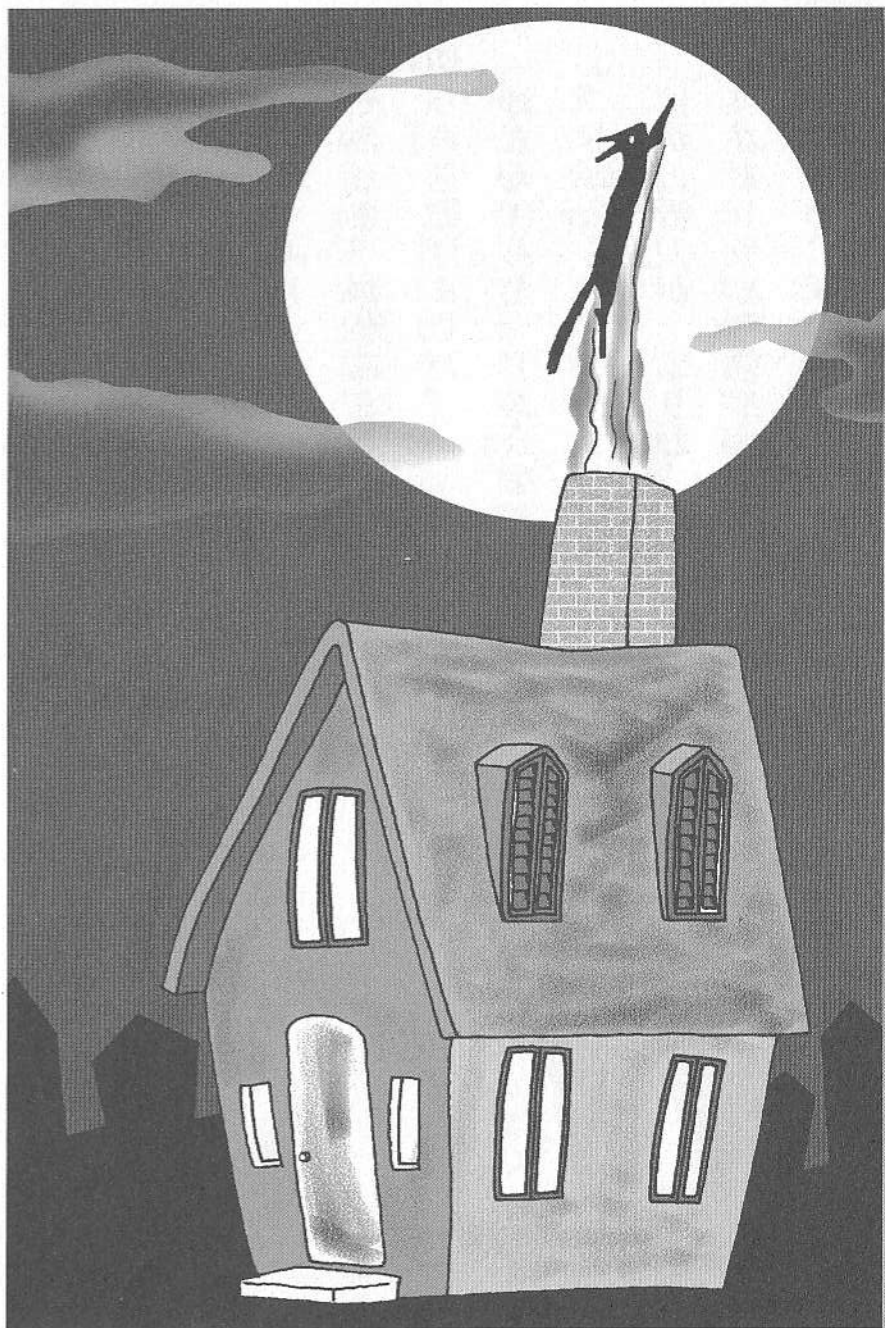
そのとき、おかみさんが 金切り声をあげました。

「おまえさん！ トム公をごらん

よ。トム公を！」

はかの番人が ふりむくと、トム公は、ぶあーつと毛をさかだて、ばいにもふくらんで、みどりの目をぺかぺかもやし、





じーっとこちらを見つめたとおもうと、しまいに、きいきい声こゑで こう
いいました。

「なに？ ティムのやつが死しんだって？ ならば、このおれが、ねこの
大王だいおうだ！」

そういうなり トム公こうはだんろにとびこみ、えんとつをかけあがって、
それきり どこかにいなくなってしまうとき。

(おわり)

『世界のむかし話』について

昔話は、時代をかくくぐってきた物語です。何代にもわたってくりかえし語られるうち、むだな部分やびったりしない箇所はぬけおち、心にのこるところがますます磨かれて、話の芯のようなものだけがのこっていきます。昔話のもつ普遍性は、こうしてつちかわれるのです。

伝言ゲームという遊びがあります。このゲームでは、最後の人にとどくころには伝言の中味はまるで変形していて、その変形の度合いが大きければ大きいほどおもしろいのですが、昔話でははるかに長い時間がたっているのに、話の展開や、出てくる小道具、特徴的なエピソードなど、主要な部分は驚くほどかわっていません。おまけに、時をかくくぐった話には、物語の強靱さともいべきものがそなわっていて、だからこそとてもおもしろいのです。

昔話はこうして普遍性を獲得しつつ、どうじに時代の影響もうけていきます。さらには、伝播していった土地の風土や、宗教、文化の影響もつけ、独自の発展をとげます。この独自性というのも、またたいへんおもしろいものです。

グリム童話の『灰かぶり』（シンデレラ）を原型とする話は、世界に二百数十もあるといます。シンデレラといえばヨーロッパの話と思われがちですが、文字に記されたのは中国のほうが古いのです。しかし、登場人物、小道具、エピソードなど、話の骨格はそっくり。中国のシンデレラも、継母に冷遇され、踊りの会にいかせてもらえず、家で穀類をえりわけ、白髪のおばあさんに晴れ着を用意してもらって、帰りぎわにくつを落とすのです。舞台は中国で、話の色彩はまるでちがいますが。

そんな話に出会うと、こんどは比較する楽しさが生まれます。筋の複雑な長い昔話では、異なる話のなかに同じモチーフが見られ、この巻の『牛かいとおりひめ』でも、水浴びにおいてきた織姫の羽衣を若者がうばいますが、『金色のつくみ』では、末の王子がラ・ボルスレーヌの服をかくすのです。パズルの部品を照らし合わせるように読んでみるのも、また楽しいものです。

なお、再話にあたっては、原話の味をそこねない範囲で、理解しにくい箇所を補足し、複雑すぎる箇所を整理したことを、おことわりしておきます。

●牛かいと おりひめ（中国）

七夕の由来話にとどまらない、夜空を舞台にした雄大なロマン。天上の娘が羽衣をとられる「羽衣伝説」や、水浴び中の娘の服を青年がかくすというエピソード、箸や櫛などの小道具が林にかわるというモチーフは、洋の東西をとわず数多く見られます。

●ソロモンのちえ（イスラエル）

かしこいソロモン王の話は多くのこっています。イギリスの動物学者ローレンツの著書『ソロモンの指輪』の題名も、ソロモンは動物のことばを解いたという故事にちなむもの。また、たまごを借りるという話も多く、『高いたまご』というスコットランドの話がありますが、こちらにはソロモンは出てきません。

●金色のつぐみ（フランス）

昔話では、末の弟、末の娘が活躍します。このことに不満の長男、長女も多いかもし

れません。昔話に出てくる兄弟姉妹は、ひとりの子どものもつ多面性や、成功にいたるまでの失敗の数々をあらわしたものと解釈できます。

●ガラスの山（ポーランド）

北ヨーロッパには、死者はガラスの山に旅立つという民間信仰があり、葬式で山猫のつめを棺桶に入れるという地域もあったそうです。そんなガラスの山も、やがて死者の国から魔物の国にかわり、さらにはこのお話のように、難題を提供する場へとかわっていき

●かささぎの かねつき（朝鮮）

朝鮮半島の古代の信仰は、シャーマニズムでした。その後、中国から仏教が入り、朝鮮王朝の時代には儒教がさかんになります。これは、儒教の影響が強くあらわれた昔話といえます。

●ふしぎな魚（モロッコ）

モロッコは、アフリカの北にあるイスラム圏の国。同じ恩がえしでも、朝鮮の話とはずいぶんちがっています。意表をつくのは、恩をかえす魚がつつぎ変身してゆくところ。

とりわけ、若者から娘にかわるのはふしぎです。

●ハメルンの笛ふき（ドイツ）

昔話ではねずみはよい存在であることが多いのですが、中世のヨーロッパではねずみの害は深刻で、ねずみ退治師がやとわれたほどです。また、ドイツのハメルンには、実際に『舞楽禁止通り』という通りがのこっていて、昔のできごとを思い出さないよう、いまでもそこでは音楽や踊りは禁止だそうです。

●おしゃべりな おかみさん（ロシア）

農民は、いつの時代にも苦しい暮らしを強いられてきました。この話は愚か者の話としながらも、じつは王さまや地主の支配をかくぐって生きる農民のしたたかさを、ユーモアたっぷりにえています。

●石の町（イラン）

イランは高原の国。オアシスを一歩出れば、はげしい乾燥と暑さ寒さがまっています。町をおそうオニとは、過酷な外界のたとえかもしれません。そんな風土では、勇気をもって難局をきりぬけてゆくことがいかに大事であるか、チャダングが身をもって教えてく

れます。

●ねこの大王（イギリス）

ねこの話といえは有名な『長靴をはいたねこ』は、昔話をもとにペローが創作したものの。いっぽう『ねこの大王』には、話の単純明快さ、語りのおもしろさ、短いながらも非常に力があるなど、昔話本来の特徴がそろっています。

とき ありえ

《参考文献》

- 新編世界のむかし話集 山室静 編訳 社会思想社
朝鮮民話集 洪沢青花 著 現代教養文庫（社会思想社）
世界の民話と伝説⑥トルコ・蒙古・朝鮮編 柴田武ほか 著 さ・え・ら書房
ジャックと豆のつる——イギリス民話選 ジェイコブズ 作／木下順二 訳 岩波書店
世界のむかし話 瀬田貞二 訳 学習研究社

学年別／新おはなし文庫
世界のむかし話 二年生
© 2001, Arie TOKI

2001年4月 1刷

著 者 とき ありえ
発 行 者 今 村 正 樹
本文印刷 中央精版印刷株式会社
多色印刷 小宮山印刷株式会社
製 本 中央精版印刷株式会社

発行所 株式会社 偕成社

〒162-8450
東京都新宿区市谷砂土原町3の5
☎(03)3260-3221(販売)・(03)3260-3229(編集)
<http://www.kaiseisha.co.jp/>

NDC908 160p 22cm

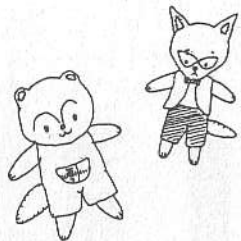
☆落丁本・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-03-923160-0 Printed in Japan



小社は平日も休日も24時間、本のご注文をお受けしています。
Tel: 03-3260-3221 Fax: 03-3260-3222 e-mail: sales@kaiseisha.co.jp

ユダヤのむかし話 (世界のむかし話・18) 高階美行 編訳 偕成社
フランスのむかし話 (世界のむかし話・3) 長野晃子 編訳 偕成社
モロッコのむかし話 (世界のむかし話・11) クナツパート 編訳 / さくまゆみこ 訳 偕成社
ソビエトのむかし話 (世界のむかし話・19) 田中泰子 編訳 偕成社
世界のむかし話 ⑩北欧編 瀬田貞二 訳 ほるぷ出版
朝鮮の民話 (上) (下) 瀬川拓男・松谷みよ子 著 偕成社文庫
ベルシアのむかし話 ヘプナー再話・細田理美 訳 偕成社文庫
中国のむかし話 君島久子・古谷久美子 編訳 偕成社文庫
ラング世界童話全集 (全12巻) 川端康成・野上彰 訳 偕成社文庫



おはなしカーニバル

おもしろさいろいろ!

絵がたくさんはいつた楽しい幼年童話集。

〈改訂・改装版〉

世界のどうわ傑作選

選びぬかれた世界のどうわ

面白さばつぐんのロングセラー



- くまさんの あかいくるま
森山京・作／いけずみひろこ・絵
- おつかい おつかい
佐々木田鶴子・作／木村かほる・絵
- クッキーたべたの だあれ?
佐々木田鶴子・作／木村かほる・絵
- チヨコレートくまちゃん
末吉暁子・作／伊東美貴・絵
- まほうつかいを やっつけろ!
大友康夫・作／絵
- きょうりゆう一びきください
竹下文子・作／高島純・絵
- みずたまのドットちゃん
登坂俊子・作／長野ヒデ子・絵
- オラ、ウーたん!
山下明生・作／村上康成・絵
- おばあちゃん おみまいだよ
竹下文子・作／鈴木まもる・絵
- くいしんぼうせんちよう
大友康夫・作／絵
- とりかえっこ ないしよでね
竹下文子・作／長野ヒデ子・絵

- 1 ロッタちゃんのひっこし
基本図書
リンドグリーン作 山室静訳
- 2 ちいさいロッタちゃん
山室静訳
リンドグリーン作
- 3 三人のシユタニスラウス
基本図書
かみ舟のふしぎな旅
フェラミークラ作 中村浩三訳
- 4 三人のシユタニスラウス
フェラミークラ作 中村浩三訳
- 5 ぶりっかすの子ねこ
課題図書
ディヤング作 中村妙子訳
- 6 きかんしゃ 1414
基本図書
フェルト作 鈴木武樹訳
- 7 ジップくん宇宙へとびだす
ロダリー作 安藤美紀夫訳
- 8 おばけはケーキをたべない
ルックポーケ作 塩谷太郎訳

- なんでも ぼい
山中恒・作／原ゆたか・絵
- きょうは さいこう!
メアフェルト・作／絵 野坂悦子・訳
- サーカスのよる
芭蕉みどり・作／絵
- まだかな まだかな
伊藤正道・作／絵
- ライオンくんを ごしよりたい
角野栄子・作／松井なつ代・絵
- ふしぎな たんじようび
大友康夫・作／絵
- たからもの みつけた
佐々木田鶴子・作／木村かほる・絵
- シラノせんせい たいへんだ!
おのりえん・作／妙木浩之・絵
- にんじんたべてみる?
ソトケ・作／ささきたつこ・訳
- じてんしゃって いいやつだ!
ソトケ・作／ささきたつこ・訳

- 9 おかあさんは魔女
ベネット作 前田三恵子訳
- 10 わたしジャネット一年生よ
基本図書
ブレンダー作 上田真而子訳
- 11 ふうせんがはこんだ手紙
ヘイウッド作 厨川圭子訳
- 12 ふしぎなお人形
ゴッデン作 厨川圭子訳
- 13 ぼくの犬キング
ウォーバーク作 中村妙子訳
- 14 小人ヘルベのぼうけん
プロイスラー作 中村浩三訳
- 15 小人ヘルベと
大食らいのツポッテル
プロイスラー作 中村浩三訳

学年別・新おはなし文庫（全30巻）

A5判・上製
平均一七〇頁

一年生10巻

- (1) イソップどうわ 一年生
- (2) グリムどうわ 一年生
- (3) アンデルセンどうわ 一年生
- (4) 世界の名作どうわ 一年生
- (5) 日本のむかし話 一年生
- (6) 世界のむかし話 一年生
- (7) 世界のわらい話 一年生
- (8) おばけ・ゆうれい話 一年生
- (9) ことわざものがたり 一年生
- (10) かかくなぜどうして 一年生

二年生10巻

- (1) イソップどうわ 二年生
- (2) グリムどうわ 二年生
- (3) アンデルセンどうわ 二年生
- (4) 世界の名作どうわ 二年生
- (5) 日本のむかし話 二年生
- (6) 世界のむかし話 二年生
- (7) 世界のわらい話 二年生
- (8) おばけ・ゆうれい話 二年生
- (9) ことわざものがたり 二年生
- (10) かかくなぜどうして 二年生

三年生10巻

- (1) イソップ童話 三年生
- (2) グリム童話 三年生
- (3) アンデルセン童話 三年生
- (4) 世界の名作童話 三年生
- (5) 日本のむかし話 三年生
- (6) 世界のむかし話 三年生
- (7) 世界のわらい話 三年生
- (8) おばけ・ゆうれい話 三年生
- (9) ことわざ物語 三年生
- (10) 科学なぜどうして 三年生

◇同一書名のものが各三冊に分かれています。各学年の興味と理解力に応じ、内容はそれぞれ異なっています。